

42470

教科書文庫

4
810
42-1941
200030
1764

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

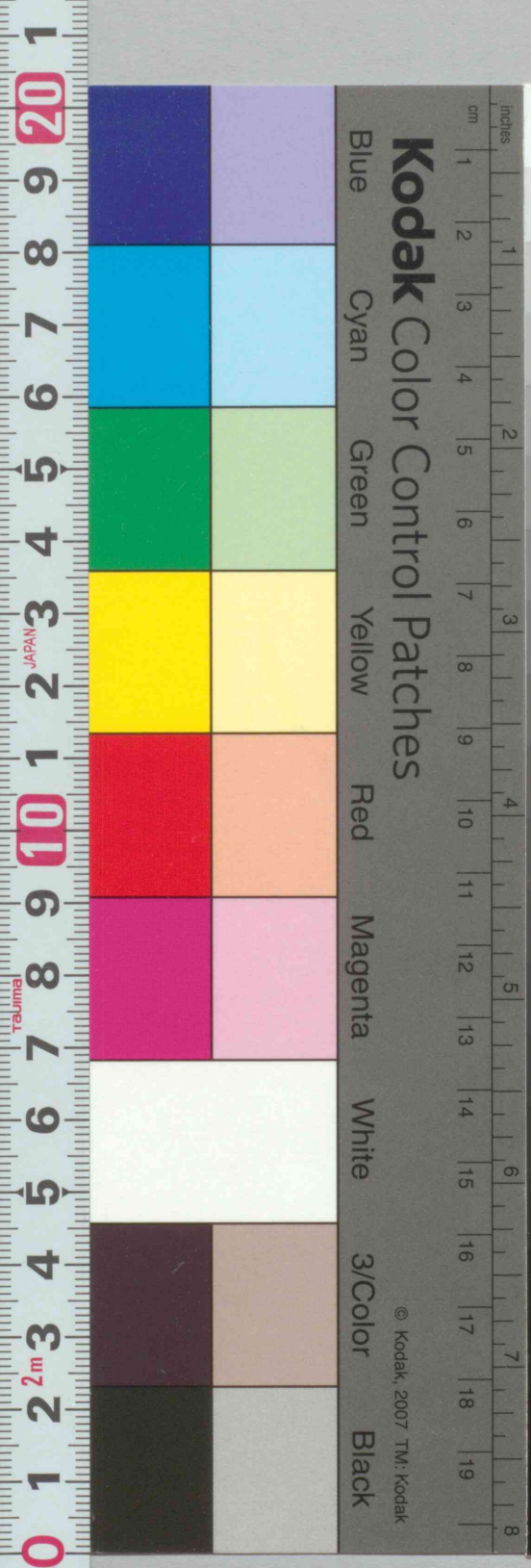


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
42-1941
2000301764

新制女子國語讀本

新教授要目準據

四年制用 卷八

日三十月一十年六十和昭  
濟定檢省部文  
用科語國校學女等高

教科書文庫

4

810

42-1941

2000301764

資料室

375.9  
An4

新制女子國語讀本

四年制用

卷八

新教授要目準據

臺北帝國大學教授  
學習院教授  
安藤正次  
東條操 共編

広島大学図書

2000301764

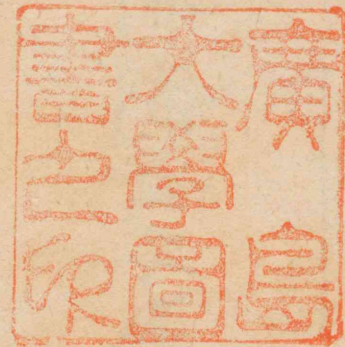


十一課

昔田方あり

るにけい道はわねてさ

かき所を今口は田んがかり



隅知と吾大王之可食天下尔國志思毛澤二  
 隆有山川之清河内跡御心平去野乃園之花  
 穀相秋津乃野急尔家極太敷庄波而磯乃大  
 家人老船並三且川渡舟競夕河渡此川乃徑事  
 奈久此山乃弥高思良珠水激瀧之宮子波見礼  
 此不能う向

卷八 目次

一	國語の愛護	五十嵐力	一
二	折節の移りかはり	吉田兼好	八
三	塵の中	樋口一葉	一二
四	いさよふ月	阿佛尼	一九
五	新島守	増鏡	二三
六	水無瀬懷古	谷崎潤一郎	三五

七	蕉風と天明調(俳句)	諸家	四七
八	すがの荒野(短歌)	諸家	四九
九	馬方三吉	近松門左衛門	五三
一〇	春は曙	清少納言	六三
一一	須磨の秋	紫式部	六八
一二	都鳥	伊勢物語	七一
一三	かぐや姫	竹取物語	七四
一四	萬葉集抄	諸家	八三

一五	日本文學概観	芳賀矢一	八八
一六	冬から春へ	水野葉舟	九五
一七	藤村詩抄	島崎藤村	一〇三
	一千曲川旅情の歌		一〇三
	二椰子の實		一〇五
一八	朗詠	諸家	一〇七
一九	羽衣	謠曲	一一〇
二〇	世界の四聖	高山樗牛	一一七

二 生活の中心

阿部次郎 一三二

自修文

二三 手巾

芥川龍之介 一四〇

二三 内助の力

穂積重遠 一五二

— 目次 終 —



五十嵐力  
文學博士。早稻田  
大學教授。國文學  
者。米澤市の人。  
明治七年生。

### 新制女子國語讀本 卷八

#### 一 國語の愛護

五十嵐 力

私は國語をなるべく美しく、味のあるやうに、品の高いやうに發達させたい。それについては、教育の方面に於てもなるべく然るべき機會をつかまへて、この思想を學生に吹き込むやうにし、美しい國語を會得させたいものと思ひます。言葉の美とか味はひとかいふのは、例へば、「うまい物を食べた。」といふ事を言ひ表す場合に、「うまかつた。」といひしかつた。」といへば、意味はわかるし文法にも合つてゐるが、たゞそれだけで、人を動かす味はひといふものがないでせう。それを「頬が落ちさうだ。」といふと、意味がわかるば

かりでなく、一種の面白味がついて来るではありませんか。「途中で遊んでゐた。」「居睡をした。」といへば、平明であるといふたゞそれだけですが、道草を食ふ。「船をこぐ。」といへば、すぐに特別の味はひを感じさせられるではありませんか。これは何の爲でありませうか。いろ／＼の理由がありませうけれども、その主なる一つは、思ひ寄せた譬喩が奇拔で、しかも妥當である爲、もう一つは、事に二事を疊みこむ所から、簡潔で同時に含蓄があるやうになる爲でありませう。

古事記天の岩戸入の段に、「常夜往」といふ文句があります。天照大御神が岩戸に御隠れになつたので、永久の夜がつゞいたといふ事を現した句であります。その心持がこの三字五音の中に、何とも言はれず簡潔に、しかも生き／＼と現されて居る。昨日も、今日も、明日も、明後日もと、限りなく續く夜でせう。そしてその黒い姿

常夜往

古事記に、「こゝに天照大御神、見畏みて、天石屋戸を閉てて刺籠りましましき。すなはち高天原皆暗く、葦原の中つ國悉に闇し。此に因りて常夜往く。」とある。

大 祓

六月・十二月の晦日、百官以下天下萬民の罪穢を祓ひ除く儀式。

伊東忠太

工學博士。東京帝國大學名譽教授。古代建築に精し。山形縣の人。慶應三年(一八七七)生。

の果てしもない怪物が、のつし／＼と限りなく長く／＼進んで行くのでせう。私はかういふ詞の生きた命を味はひたいと思ふのであります。

かういふ例は、外にも澤山ありませう。祝詞の大祓の詞に、「底つ岩根に宮柱太敷立て……」といふ句があります。私など幾度も讀みながら、たゞ大家屋建築のための誇張的形容とのみ思つてゐましたが、大正十二年の大震災の折に、工學博士の伊東忠太氏が、耐震家屋の事を説かれた中に、「大昔の祝詞に、いはゆる『底つ岩根に宮柱太敷立て。』といふのが建築の理想である。岩を離れた土の上に建てるから、地震に遭ふと一たまりもなく揺りつぶされるので、岩盤の上に建てれば、家全體が岩と一緒に動くから、めつたにつぶれるものでない。この岩盤の上に柱を立てる理想的建築法を、大昔の吾々の祖先が已に立派に道破し且實行してゐたのである。」と

祈年祭  
陰曆二月四日、風  
雨の災害なく、穀  
類の豊熟せんこと  
を神祇に祈る祭。

いはれたのを見て、成程と感じたことがありました。また同じ祝詞の祈年祭の中に、たなひぢ手脇に水沫かき足り、むか向股に泥かき寄せて、取作らむおき奥つ御年を……といふ文章があります。泥田の中に腕の附根まで、向股まで入れて、泥土をかきまはして稲を作れといふ意味であります。私の百姓友達が曾てこの文を見て、實にえらい事を云つたものである。一體、田の草を除くのは、たゞ草を取るだけの仕事ではなくして、稲の根の生えて居る泥の中へ空氣と日光とを入れる爲である。だから表面の草を取るだけでなく、かんくといふ烈日に照らされつゝ、煮え立つやうな田に浸つて、水の泡をぶつぶつ立てて十分に掻き廻さねばならぬ。この祝詞が、かういふ農作道の極意を原始的の言葉で簡潔に言ひ表してゐるのが實に面白い。と言つて感歎したことがありました。かう見ると、國語の力といふものも、なか／＼偉いものです。

昔の言葉や文章だけではありません。今でも同じことで、日露戦争の時の戦報に、かた舷々相摩す。といふ文句があつて評判になりましたが、これも船端と船端とが摩れ合つた。といふだけのことで、言ひ表し方によつては何でもない事ですが、かた舷々相摩す。といふと、何とも言はれぬ面白さを見せてまゐりませう。

私は、すべてかういふ所に意を用ひて、成るべく自分の言葉をも立派にし、國民同士の言葉を立派にしたいと思ふのであります。芭蕉の俳文の一節に、

芭蕉はその葉廣うして琴を覆ふに足れり。或はなかば吹き折れて鳳鳥の尾をいたましめ、青扇破れて風を悲しむ。

とありますが、これは事實だけをいふと、芭蕉の葉は幅一尺位、長さ六七尺もあるが、其の廣い長い葉の秋風に吹き破られた有様がむごたらしいといふのであります。しかし、これだけでは一向につ

芭蕉  
姓は松尾、名は宗房、別號桃青、俳人。伊賀國(三重縣)の人。元祿七年(三五四)歿、年五十一。  
芭蕉は其の葉云々。移芭蕉辭にあ



イアツテ

まらないうですが、琴とか、鳳凰の尾羽とか、扇とかいふ、美しい、風流な、同時にいかにも自然で相應しい譬喩の景物を添へたので、非常に美しく面白くなりました。先づ一尺幅の長さ一間に餘る大きな葉、これで丁度よく覆へるといふ御誂の品物は、十三絃の箏の琴であります。が、琴を覆ふに足れり。といふと、青い大きい葉が活きて光つて来て、そのかけからころりんしゃんといふ耳を魅する音がして来るやうに感ぜられるではありませんか。次には、風に裂かれた様子ですが、これも最も相應しい、同時に美しい鳳凰の尾を以てすれば、あのしんなりとした鳥の王の尾羽を思ひ浮かべて、その裂けた痛ましさに涙せしめる味は、ひが加はつて来るでせう。斯様な次第で、見やう考へやうで、一向人の心を惹くにも足らぬやうな事も、好い譬喩が引かれ、美しい詞が連ねられた爲に、この味は、ひが何處から出て来たか、天から降つたか、地から涌いたかと思ふやうな妙味が出て来たのであります。

かやうに我が國には、昔も美しい言葉があつた、今も美しい言葉があります。そして、それは磨けば益、よくなるべき可能性をもつて居り、又言葉を磨けば國民の生活が美しくなり、國の位が高くなるのであるから、お互に注意して、國語を守り立てて行きたいといふのであります。

我が國は昔から、言魂の幸はふ國、言魂の助くる國といはれました。深く窮めると言魂の幸はふのは國の幸はふ所以であり、また國の一切事象は言葉の靈から重大なるたすけを受けて居るのであります。國の言葉を正しく美しくするのは、言葉そのものの爲のみではありません。

言魂の幸はふ國  
言魂の助くる國  
共に萬葉集十三卷  
柿本人麿の歌に出  
てゐる。

(國語の愛護に據る)

吉田兼好

本姓は卜部。鎌倉時代の文學者。正平五年(1190)歿。年六十八。

物のあはれは云々  
「春はたゞ花の一重に咲くばかり物のあはれは秋でまさる。」

(讀人知らず、拾遺集)

時<sup>は</sup>早く過<sup>り</sup>て、  
早く逃<sup>が</sup>げて、

花橘は云々

「さつきまつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。」  
(讀人知らず、古今集)

二 折節の移りかはり

吉田兼好

折節の移り變ること物ごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ。」と人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、今ひときは心も浮き立つものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌え出づる頃より、や、春深く霞み渡りて、花もやうくけしきだつ程こそあれ、折しも雨風うち續きて心あわたしく散り過ぎぬ。青葉になり行くまで、萬づに唯心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ古の事も立ちかへり戀しう思ひ出でらる。山吹の清げに藤の覺束なき様したる、すべて思ひ捨て難き事おほし。  
「灌佛の頃祭の頃若葉の梢すゞしげに茂り行く程こそ、世のあはれも人の戀しさも増され。」と人の仰せられしこそ實にさるもの

水鷄



源氏物語

紫式部の著した小説。

枕草子

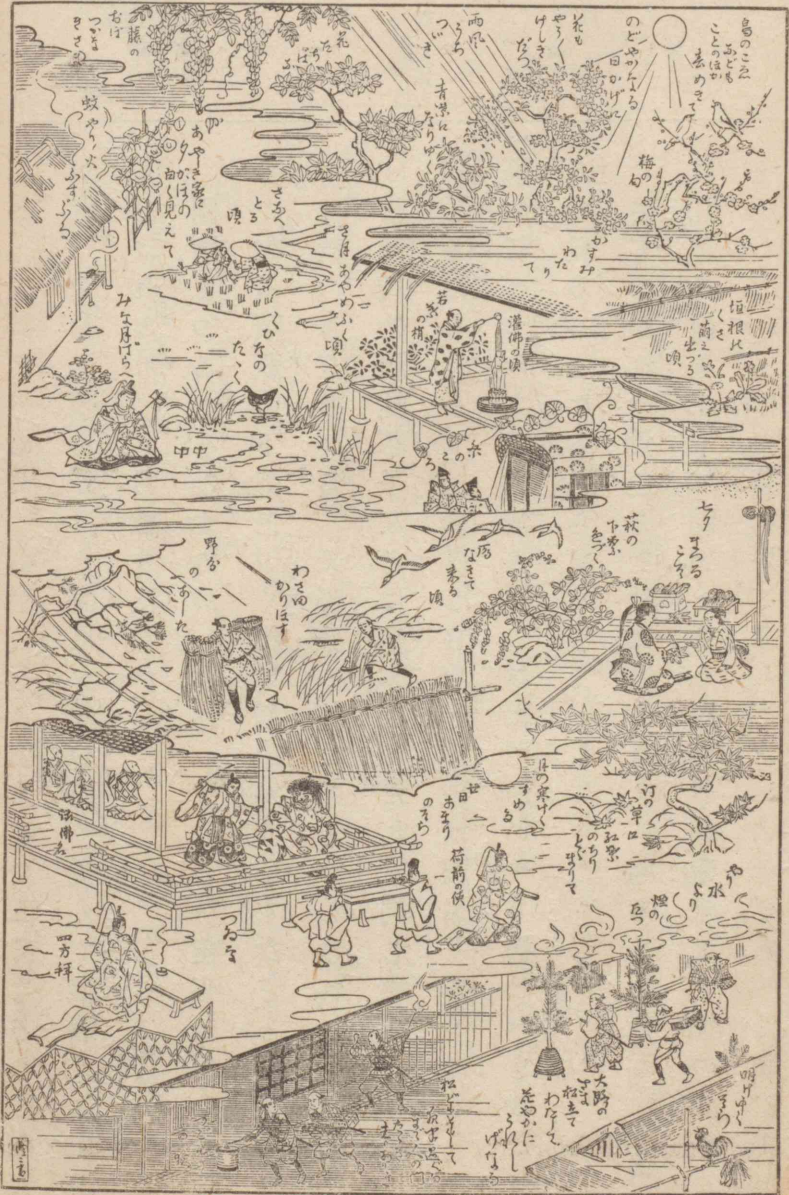
清少納言の著した隨筆。

おぼしき事云々

「おぼしき事はぬは、げにぞ腹ふくる心地しける。」  
(大鏡)

なれ。五月、あやめ葺く頃、早苗とる頃、水鷄の敲くなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月みなづき祓はらまたをかし。

棚機まつることなまめかしけれ。やうく、夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく程、早稻田刈り干すなど、とり集めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言ひ續くれば、皆源氏物語、枕草子などに事ふりにたれど、同じ事また今更に言はじにもあらず。おぼしき事言はぬは腹ふくる、わざなれば、筆に任せつゝ、あぢき無きすさびにてかいやり捨つべき物なれば、人の見るべきにもあらず。さて冬がれの景色こそ、秋にはをさく、劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り止りて、霜いと白う置ける朝、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れ果てて、人ごとにいそぎあへる頃ぞまたな



(草二修米久) り麦り福のいふり至

くあはれなる。すさまじき物にして見る人も無き月の寒けく澄  
 める廿日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名荷前の使たつ  
 などぞあはれにやんごとなき。公事ども繁く春のいそぎに取重  
 ねて催し行はるゝ様ぞいみじきや。追儼より四方拜に續くこそ  
 おもしろけれ。つごもりの夜いたう闇きに松どもともして夜半  
 すぐるまで人の門敲き走りありきて何事にかあらん事々しくの  
 のしりて足を空にまどふが暁がたより流石に音なくなりぬるこ  
 そ、年の名残も心細けれ。亡き人の来る夜とて魂祭るわざは、この  
 頃都には無きをあづまの方にはなほ爲る事にて有りしこそあは  
 れなりしか。斯くて明け行く空の景色昨日に變りたりとは見え  
 ねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま松立てわたして花  
 やかに嬉しげなるこそ又あはれなれ。

(徒然草)

三塵の中

樋口一葉

樋口一葉  
名は夏子。女流文  
學者。東京市の人。  
明治二十九年歿。  
年二十五。  
十五日  
明治二十六年七  
月

和泉町  
東京市神田區。  
二長町  
東京市下谷區。  
鳥越  
東京市淺草區の地  
名。



樋口一葉

十五日より家さがしに出づ。朝日の影まだ見え初めぬほどよ  
り、和泉町・二長町・淺草にかけても鳥越より柳原藏前あたりまで行

く。この度の思ひ立は、もとより  
店つきの立派なるをも願はず、場  
所のすぐれたるをも望まず、料ひ  
くくして人目にたつまじきあた  
りをとの定なれば、つとめて小家  
がちに、むさく、とせし處をのみ  
尋ぬ。はやうより世に落ちはふれて便なく、さゝやかなる處にの  
み住みけるものから、なほ門格子は必ずあり、庭には木立あり、家に  
は床あるものとならひけるを、天井といへば黒く煤けて仰ぐも憂

我が家

美倉橋・和泉橋  
共に東京市神田  
區。神田川に架け  
た橋。

く、柱ゆがみ、ゆか低く、軒は軒につゞき、勝手元は勝手元に並びぬ  
さるが上に、大方は疊もなく、ふすまもなく、たゞ家といふ名ばかり  
を貸すなりけり。初のほどは餘りのことにあきれて、戸の外より  
見けるばかり入りて尋ぬべき心地もせざりしが、かくてゆき、  
たりとも果もなし、とまれ間はんとて、その隣の家につきて問ふ。  
親切にかれこれ語りて聞かするもあり、かくしく差配に行き  
て問ひ給へといふもあり。差配と聞えし男の、四十ばかりにてか  
しらはげたるが、帳場格子やうなるものを控へて、そるばんはじき  
居るうしろに、中元の禮にやもらひけん、さゝやかなる砂糖袋、さて  
は素麵などやうの物をひしとならべて、いとおほふうにもものいふ  
もにくし。美倉橋と和泉橋とのあはひなる小路に、四疊半・二疊二  
間なる家あり。店は三疊ばかりも板の間になりて、こゝには疊も  
あり、建具もつきけり。長屋なれどもさまできたなからず、敷金

（保蔵金）

山の手  
東京市西北部一帯の丘陵地帯の市街

飯田橋  
東京市牛込區と麴町區との間、神田川の上流、江戸川に架けた橋  
お茶の水  
神田川、湯島聖堂附近

三圓、家賃一圓八十錢といふ、それもよし、これもよし。たゞ庭のいさゝかもなくして、裏は直ちに裏道の長屋の屋根に續きて、木立など夢にも見らるべきにあらず。うらみはこれと覺ゆるものから、なほ母君に見せ參らせて、よしとならばよしにせんといふ。邦子の頻りに疲れて道ゆき惱むもあはれなれば、けふはこれまでよとて歸る。まだ午前なりき。家に歸りてなほさまざまに相談なす。いくそ度思へども、下町に住まんことはうれしからず、午後より更に山の手を尋ねばやといふ。庭のほしければなり。

駒込、巢鴨、小石川邊はいづれも土地がら靜かによき處なれど、何がしくれがしの別荘など多く、我がやうなるいやしき商ひしたりとて、買ふ人あるまじと覺ゆ。さては詮なし。牛込ならば神樂坂あたりこそと覺ゆれど、知る人近からもわびしく、かれこれ定らずして歸る。飯田橋より御茶の水に來れば、けふは川開きとて、こ

徒  
ウ  
チ  
ワ

坂本通

東京市下谷區、上野公園より千住大橋に至る大通  
龍泉寺町  
東京市下谷區、坂本通より東方に入り、淺草公園に向ふ途中にある。

のわたり小舟浮かべて客を引けり。丘には馬車きしらせて急がすもあり。かちなるも見事に裝ひ立てて、そのさま誇らしげなり。顧みれば邦子の疲れに疲れける足を曳きて、しと汗になりて隨ひ來る。あはれ、この人もふびんなり。いと幼きに父兄に後れて、浮世めかしき遊びをも知らず、萬づはかなく送る程に、やうやう浮世の變りものに成りて、春の花の長閑なるをのみ見て、嬉しと思はぬ程になりぬる。さてや、これよりの境涯のあさましきを思へば、この人の爲も、母の爲も、悲しさは胸に滿ちて、進むべき身も覺えず。さりとして退きて行く方もなし。心細しとはかゝる時をこそ。

十七日 晴 家を下谷邊に尋ぬ。邦子の頻りに疲れて行くことをいなめば、母君と二人にてなり。坂本通にも二軒許り見たれど、氣に入りけるもなし。行きくへて龍泉寺町と呼ぶ處に、間口二

間、奥行六間ばかりなる家あり。左隣は酒屋なりければ、そこに行きて諸事を聞く。雑作はなけれど、店は六疊にて、五疊と三疊の座敷とあり、向きも南と北とにして、都合わるからず見ゆ。三圓の敷金にて、月一圓五十錢といふに、いさゝかなれども庭もあり、その家にはあらねど、裏に木立などのいと多かるもよし。さらば邦子に語りて、三人共によしとならばこゝに定めんとて、その酒屋に頼みて歸る。

邦子も異存なしといふより、夕かけて復行く。少し行違ひありて、餘人の手に落ちん氣色なれば、さまぐに盡力す。

二十日 薄曇 もの深き本郷の靜かなる宿より移りて、こゝに始めて寝ぬる夜の心地、まだ生まれ出でて覺えなかりき。家は長屋建なれば、壁一重には人力ひく男ども住むめり。商ひをはじめての後はいかならん。その者どももお客なれば、機嫌にさからは

じとつとむるにこそ。このあたりは人氣あしき處と人々語り聞かせたるが、勇氣なき家の、いかにあなどられてくやしき事ども多からん。何事もわれ一人はよし、母は老いたり、邦子はいまだ世間を知らず、そが思ひ煩ふ氣色を見るもあはれなり。さて商ひはいかにして始むべきなど、千々に心は碎けぬ。蚊のいと多き處にて、藪蚊といふ大きなるが夕暮よりうなり出づる、おそろしきまでなり。この蚊なくならんほどは綿入着る時ぞとさる人のいひしが、冬までかくてあらんことわびし。

廿三日 晴 朝より伊勢利來る。店に棚つりなどして午前をすぐ。午後歸るさながら問屋にかけ合ひくれんといふ。誰にまれ諸共にとあるにさらば我を伴なひ給へとて共にゆく。門跡前に中村屋忠七とよべるが伊勢利の昔馴染なるよしにて、此處へ周旋す。五圓許りの品とゝのへくれよといふ。手つけとして一圓

渡す。明日荷はもち込むべき約束、伊勢利は明後日朝かざりつけに來らむといふ。諸事しをへて歸る。

六日 晴 店を開く。向ひの家より直ちに買ひに來る。なかなかをかきしきものなり。菊地君のもとより紙類少し仕入る。二圓近くなりけり。

今宵はじめて荷を背負ふ。なか／＼に重きものなり。家に歸りしは十時近くなりき。持參の紙類、明日の朝店に出すやう今宵の中に下拵へをなす。十一時床に入る。

(一葉全集)

阿佛尼

藤原爲家の妻。歌人。鎌倉時代の人。歿年未詳。壁の中より云々。古文孝經をさす。

四 いさよふ月

阿佛尼

昔壁の中よりもとめ出でたりけん書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな。のくず葉かへすも書き置くあとたしかなれどもかひなきものは親のいさめなり。また賢王の人をすてたまはぬまつりごとにももれ、忠臣の世を思ふなすけにも捨てらるゝものはがすならぬ身ひとつなりけりと、思ひ知りながら、又さてしもあらで、なほこのうれへこそ、やるかたなく悲しけれ。更に思ひつゞくれればやまと歌の道は、たゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらん。ひのもとに、あまの岩戸ひらけし時、よもの神たちの神樂のことばをはじめて、世を治め物をやはらぐるなかだちとなり、にけるとぞ、この道のひじりた

四 いさよふ月

五

(1) 壁の中より云々  
古文孝經をさす  
藤原爲家の妻  
歌人  
鎌倉時代の人  
歿年未詳

昔壁の中よりもとめ出でたりけん書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな。のくず葉かへすも書き置くあとたしかなれどもかひなきものは親のいさめなり。また賢王の人をすてたまはぬまつりごとにももれ、忠臣の世を思ふなすけにも捨てらるゝものはがすならぬ身ひとつなりけりと、思ひ知りながら、又さてしもあらで、なほこのうれへこそ、やるかたなく悲しけれ。更に思ひつゞくれればやまと歌の道は、たゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらん。ひのもとに、あまの岩戸ひらけし時、よもの神たちの神樂のことばをはじめて、世を治め物をやはらぐるなかだちとなり、にけるとぞ、この道のひじりた

使り  
あは

ひんじは  
ひんじ

四 いさよふ月

まのつらゆま

三

二度勅をうけて  
定家撰  
新古今集  
新勅撰集  
爲家撰  
續後撰集  
續古今集

二人の男の兒  
爲相 爲守

細川  
播磨國(兵庫縣)細川の庄

子を思ふ云々  
「人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」  
(藤原兼輔 後撰集)

ちは記しおかれたりける。

さて又集を撰ぶ人はためしおほかれど、二度勅をうけて代々に聞えあげたるは、たぐひなほありがたやありけん。そのあとにしも、たづさはりて、二人の男の兒ども、もちの歌のふる反故どもを、いかなる縁かありけん、預りもたることあれど、道を助けよ、子をばぐくめ、後の世をとへとて、深きちぎりをむすびおかれし細川のながれも、故なく、せきとめられしかば、あんとふのりのともし、火も、道を守り、家をたすけん、親子のいのちも、もろともにきえをあらそふ年月を経て、危く心細きものから、何として、つれなくけふまではながらふらん。  
惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心のやみはなほしのびがたく、道をかへりみるうらみは、やらんかたなく、さてもなほ、あづまのかめの鏡にうつさばくもらぬかげもやあら

はるゝと、せめておもひあまりて、よるづの憚りをわすれ、身を益なきものになしはてて、ゆくりもなく、いさよふ月にさそはれ出で、んとぞ思ひなりぬる。

頃はみ多たつはじめのさだめなき空なれば、降りみ降らずみ時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつゝ、事に觸れて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとて、もどまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。

目かれせざりつるほどだに、あれまさりつる庭も籬も、ましてと見まはされて、したはしげなる人々の袖のしづくも、なぐさめかねたる中にも、侍従大夫などのあながちに打屈したるさまいとこゝろぐるしければ、さまざまのいひこしらへつ。

代々に書きおかれける歌の草子どものおくがきして、あだならぬかぎりをえりしたゝめて、侍従の方へ送るとて、書き添へたる歌、

侍従  
爲相  
大夫  
爲守

人やりならぬ云々  
「人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなん」  
(源實 古今集)

四 いさよふ月

三



和歌の浦にかきとゞめたる藻鹽草

これを昔のかたみとも見よ

あなかしこ横波かくな濱千鳥

ひとかたならぬ跡を思はば

これを見て侍従のかへりごといと疾く有り。

遂によもあだにはならし藻鹽草

かたみを三代の跡に残せば

迷はまし教へざりせば濱千鳥

ひとかたならぬ跡をそれとも

昔の人に聞かせたてまつりたくて、又うちほたれぬ。

(十六夜日記)

五 新島守

増

鏡

一

四月二十日帝おりさせ給ふ。春宮四つにならせ給ふに譲り申

させ給ふ。近頃皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき

御行末ならんかし。同じき二十三日院號の定めありて、今おりさ

せ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院をば中院と申し、父帝をば本

院とぞ聞えさす。このほどは家實の大臣關白にておはしつれ

ど、御讓位の時左大臣道家のおとゞ攝政になり給ふ。かのあづま

の若君の御父なり。

さても院の思し構ふること、忍ぶとすれどやうく漏れ聞えて、

ひがしざまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊

賀の判官光季といふものあり。かつく彼を御勘事の由仰せら

増鏡

三卷二十篇。著者不詳。後鳥羽天皇の即位から後醍醐天皇が隠岐から御歸京になるまで十

四月二十日

承久三年(八二)

帝 第八十四代 順徳

春宮 第八十五代 仲恭

天皇 御兄の院

父帝 土御門天皇

後鳥羽天皇

家實 近衛基通の子。仁

道 治三年(八三)歿

年六十

後京極良經の子。

寛元三年(九五)

歿年六十

あづまの若君

當時の將軍頼經。

鎌倉にあつた。康元

元年(九六)歿年

院  
後鳥羽院。

わが身  
北條義時。時政の  
子。元仁元年(六  
巴)歿。年六十二。  
時房  
北條時房。義時の  
弟。仁治元年(六  
三)歿。年六十六。  
泰時  
義時の長子。仁治  
三年(六三)歿。年  
六十。

るれば、御方に参るつはものども押寄せたるに、遁るべきやうなく  
て、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思し召しける。  
あづまにもいみじうあわて騒ぐ。さるべくて、身の失すべき時  
にこそあなれと思ふものから、討手の攻め来りなん時には、かなき  
さまにて屍を曝さじ、おほやけと聞ゆとも、親らし給ふことならね  
ば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と  
泰時といふ一男と二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都に  
のぼす。泰時を前に据ゑていふやう、おのれをこのたび都に参ら  
するは思ふところ多し。ほいの如く清き死をすべし。人にうし  
る見えなんには、親の顔また見るべからず。今を限りと思へ。賤  
しけれども、義時君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横  
さまの死をせんことはあるべからず。心を猛く思へ。(おのれう  
ち勝つものならば、二たびこの足柄箱根山は越ゆべし。など泣く

泣くいひきかす。まことにしかなり。また親の顔拜まんことも  
いと危ふしと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今や限り  
と哀れに心細げなり。



(筆實信原藤) 皇天羽鳥後

のほとりにも、はからざるにかたじけなく鳳輦を先立てて、御旗を  
揚げられ、臨幸の嚴重なることもはべらんに参りあへらば、その時  
の進退いかゞはべるべからん。この一ことをたづね申さんとて、  
ひとり馳せはべりき。といふ。義時とばかりうち案じて、賢くも

問へるをのこかな。そのことなり。正に君の御輿に向ひて弓を引くことはいかゞあらん。さばかりの時は兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし。さはあらで君は都におはしましなから、軍兵を賜はせば、命を捨てて千人が一人になるまでも戦ふべし。」といひもはてぬに、急ぎ立ちにけり。

都にも思しまうけつることなれば、ものふども召し集へ、宇治勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用心ことなり。公經の大將一人のみなん、御うまごのこともさることにて、北の方、一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重く思して、さしいらへもせず、院の御心の軽きことと、あぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、また修明門院

公經

藤原氏。西園寺家の祖。寛元二年(一〇八四)歿。年七十四。

御うまご

將軍賴經のこと。賴經は公經の女の出である。

故大將

賴朝をいふ。

七條院

藤原頼子。後鳥羽天皇の御母。安貞二年(一一八六)歿。年七十二。

修明門院

藤原重子。順徳天皇の御母。文永元年(一一九三)歿。年八十三。

中院  
土御門上皇。

新院  
順徳上皇。

富士川  
源を山梨縣に發し、静岡縣駿河灣に注ぐ。長さ一六一軒。  
天龍  
源を長野縣諏訪湖に發し、静岡縣を貫流してゐる。長さ約二一六軒。

の御はらからの甲斐の宰相中將範茂など、つぎ／＼數多聞ゆれど、さのみは記し難し。いくさにまじり立つ人々、この外の上達部にも、殿上人にも數多ありき。中院は、あかで位をすべり給ひしより、言にいでてこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御騒ぎにも、殊に交らひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづいくさのことなどもおきて仰せられけり。いつの年よりも五月雨晴れ間なくて、富士川、天龍などえもいはずみなぎり騒ぎで、いかなる龍馬もうち渡し難ければ、攻め上る武者どもも怪しく惱めり。かゝれども終に都に近づく由聞ゆれば、君の御武者も出でたつ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分ち遣す。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山に逃げ籠り、遠き世界に落ち下り、すべて安げなく騒

ぎ満ちたり。いかゞあらんと君も御心亂れて思し惑ふ。かねては猛く見えし人々もまことのきはになりぬればいと心あわたしく、色を失ひたるさまども、たのもしげなし。六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて、終に御方のいくさ破れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下たゞものにぞ當り惑ふ。

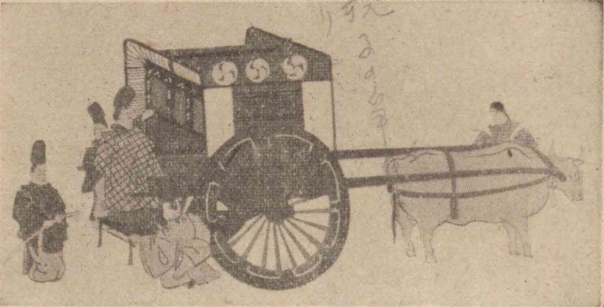
二

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍謀らひおきてつ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院宮々、ところごとく、に思し惑ふことさらなり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車の怪しげなるにて、七月六日入らせ給ふ。けふを限りの御ありき、あさましう哀れなり。「ものにもがなや」と思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐし

鳥羽殿  
城南の離宮ともいふ。京都市伏見區下鳥羽に舊蹟がある。ものにもがなや「とりかへすものもがなや世の中をありしならのわが身と思はん。」(源氏物語)河海抄

おろす。御年よそぢに一つ二つや餘らせ給ふらん、まだいと惜しがるべき御ほどなり。

信實  
藤原信實。畫家として知られてゐる。文永二年(一一九一)歿。年七十。



網代車

信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はんとなり。かくて同じ十三日に御舟に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心ち、この世の同じ御身とも思されず、いみじういかなりける代々の報にかと恨めし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや七月九日みかどをもおろし奉りき。この四月かとお、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へるためしも、これや初なるらんに、「唐土にぞ四十五日とかや位におはするためしありける。」と

唐土にぞ云々  
秦の第三世子嬰のこと。始皇の孫の四十六日で沛公に降り秦は亡んだ。



將門 平將門。檢非違使。たむと。藤原秀郷。平貞盛に滅さる。朱雀天皇の天慶三年(六〇〇)歿。

純友 藤原純友。將門と相應じて反し。捕へられて斬らる。朱雀天皇の天慶三年(六〇〇)歿。

義親 源義親。源義家の第二子。堀河天皇の康和三年(一〇三二)に西に横行して命をさかす。後醍醐天皇の天仁元年(一一二〇)に平河原に斬らる。六條河原に斬らる。治元年(一一二〇)に平河原に斬らる。治元年(一一二〇)に平河原に斬らる。

信賴 藤原忠隆の第三子。源義朝と結んで平治の亂を起し。後白河上皇・二條後遂に平治盛に奉る。後醍醐天皇の天仁元年(一一二〇)に平河原に斬らる。治元年(一一二〇)に平河原に斬らる。

故院 後白河法皇。

承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に崇徳院の世を亂り給ひしだに、故院の御位にてうち勝ち給ひしかば、天照大御神も御裳濯川の同じ流と申しながら、なほ時の御門を守り給はすることは強きなめり。とぞ古き人々も聞えし。また信賴の衛門督おほけなく二條院を齎し奉りしも、終に空しき屍をぞ道のほとりに棄てられける。かゝれば舊りにしことを思ふにも、なほさりともしいかでか三皇今上數多在します王城の徒らに亡ぶるやうやはあらんと、たのもしくこそ覺えしに、かくいとあやなきわざの出で來ぬるは、この世一つのことにあらざらめども、迷の愚かなる前には、なほいと怪しかりし。六つにて位に即かせ給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も土佐院十二年、佐渡院十一年、尙天の下には同じことなりしかば、すべて三十六年がほど、この國のあるじとして萬機の政を御心

二條院 第七十八代、二條天皇。六つにて後鳥羽天皇。

津の國云々 津の國のこやとも人をいふべきに隙こそなけれ慮の八重ぶき(和泉式部、後拾遺集)

一つにをさめ、百の官を従へ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまさされる御有様にて、遠きを憐び近きを撫で給ふ御惠、雨の脚よりも繁ければ、津の國のこやのひまなき政を聞し召すにも、難波の葦の亂れざらんことを思しき。藐姑射の山の峯の松も、やうく枝を連ねて千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ、幾春を経て空行く月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありく、てよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立別れ、おのがちりく、にさすらへ、磯のとまやに軒を並べて、自らこ問ふものとは、浦に釣するあま小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わが故郷のしるべにかとばかり、眺め過させ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらんだに、あす知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいていつをはてとか廻りあふべき限りだに、なく、雲の浪、煙の浪の幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべき

御さまども、口惜しといふも愚かなり。

このおはします所は、人離れ、里遠き島の中なり。海面よりは少し引入りて、山陰に片そへて、大きやかなる巖の峙てるをたよりにて、松の柱に葦ふける廊など、けしきばかりことそぎたり。まことに柴の庵のたゞ暫しとかりそめに見えたる御宿りなれど、さる方になまめかしく、故づきてしなさせ給へり。水無瀬殿思し出づるも、夢のやうになん。遙々と見やらるゝ海の眺望、二千里の外も残りなき心ちする、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹きくるを聞き召して、

われこそは新島守よおきの海の

あらし浪かぜこゝろして吹け

同じ世にまたすみの江の月や見ん

けふこそよそにおきのしま守

柴の庵云々  
いづくにもすまね  
ずばたすまね  
らん柴の庵のし  
しなる世に  
(西行法師、新古今集)  
水無瀬殿  
後鳥羽天皇のお造りになつた御殿、攝津國(大阪府)三島郡島本村にある。二千里の外云々  
「三五夜中新月ノ心」  
色。二千里外故人ノ心。  
(白氏文集)

六 水無瀬懷古 谷崎潤一郎

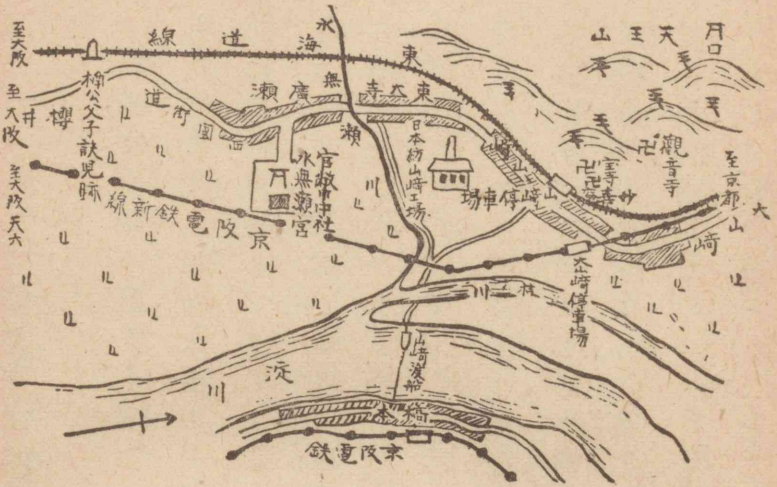
山崎は山城の國乙訓郡にあつて、水無瀬の宮跡は攝津の國三島郡にある。されば大阪の方から行くと、新京阪の大山崎で降りて、逆に引きかへしてそのお宮の跡へ着くまでの間に國境を越すことになる。私は山崎といふ所は省線の驛の附近を何かの折にぶらついたことがあるだけで、この西國街道を西へ歩いてみるのは始めてなのである。少し行くと道が二つに岐れて、右手へ曲つて行く方のかどに、古ぼけた石の道標が立つてゐる。それは芥川から池田を経て伊丹の方へ出る道であつた。荒木村重や池田勝入齋や、あの信長記にある戦争の記事を想へば、さういふ戦國の武將どもが活躍したのは、その伊丹・芥川・山崎をつなぐ線に沿うた地方であつて、古はおそらくそちらの方が本道であり、この淀川の岸を

谷崎潤一郎  
小説家。東京市の人。明治十九年生。  
山崎  
京都府乙訓郡大山崎村。東海道線大山崎驛附近。  
水無瀬の宮跡  
大阪府三島郡島本村。廣瀬にある。今官幣中社。水無瀬宮がある。  
新京阪  
大阪天神橋六丁目から京都に到る電車。今は京阪電車と合併してゐる。  
芥川  
大阪府三島郡高槻町の西にある村。  
池田  
大阪府豊能郡にある町。  
伊丹  
兵庫縣川邊郡にある町。  
荒木村重  
攝津國(兵庫縣)の人。信濃守と稱し、判髮して道童と改めた。始め信長に従つたが、後叛いて伊丹城に據り、信長のために陥られ安藝に逃れた。

池田勝入齋  
名は信輝。攝津の  
人。信長に仕へた。  
豊臣秀吉と明智光  
秀を山崎に破る  
剃髪して勝入と號  
した。天正十二年  
(一六二四)歿。年四  
十九。

信長記

十五卷。一名安土  
記といふ。太田牛  
一(三三)より天正十  
年(三三)に至る織  
田信長の事歴を記  
述したもの。要  
江口の渡し  
現在大阪市東淀川  
区にある淀川と  
神崎川の分岐點で  
往昔西海から來た  
船舶は皆こゝに入  
泊し、旅客は川舟  
に乗替へて京都に  
上つた。交通の要  
路にあつたので頗  
る繁榮した。



縫つて進む街道は、舟行には便利だ  
つたであらうが、蘆荻の生ひ茂る入  
江や沼地が多くて、陸路の旅には不  
向きであつたかも知れない。さう  
いへば江口の渡しのもとなども、今  
來る時に乗つて來た電車の沿線に  
あるのだと聞いてゐる。現在では  
その江口も大大阪の市内にはひり、  
山崎も先年の京都市の擴張以來大  
都會の一部に編入されたけれども、  
しかし京と大阪の間は、氣候、風土の  
關係が阪神間のやうなわけには行  
かないらしく、田園都市や文化住宅

忠臣藏  
竹田出雲等の合作  
の「假名手本忠臣  
藏」。

阪急沿線  
大阪と神戸間の阪  
急電車の沿線。

北野の天神  
菅原道眞のこと。  
君がすむ云々  
「君がすむ宿の梢を  
ゆくくも隠るゝ  
までもかへりみし  
はや。」

地がさう俄には開けさうにも思へないから、まだしばらくは草深  
い在所の趣を失ふことがないであらう。忠臣藏にはこの近くの  
街道に猪や追剥ぎが出たりするやうに書いてあるから、昔はもつ  
とすさまじい所だったのであらうが、今でも道の兩側に並んであ  
る茅葺の屋根の家居の有様は、阪急沿線の西洋化した町や村を見  
馴れた眼にはひどく時代がかつてゐるやうに見える。「なき事に  
よりてかく罪せられ給ふをからくおぼし嘆きて、やがて山崎にて  
出家せしめ給ひて」と、大鏡では北野の天神が配流の道すがら此處  
で佛門に歸依せられて、君がすむ宿の梢をゆくくもといふあの  
歌を詠まれたことになつてゐる。さやうに此の土地は随分古い  
驛路なのである。たぶん平安の都が出來たのと同じ頃に設けら  
れた宿場かも知れない。私はそんなことを考へながら、舊幕の世  
の空氣が暗い庇の陰に漂つてゐるやうな家作を一軒々々窺いて



歩いた。

宮居の跡は水無瀬川であらうと思はれる川にかゝつてゐる橋を越えて、それから又少し行つたあたりの街道から左へ折れた所にあつた。承久の亂にひとしくふしあはせな運命におあひ遊ばされた後鳥羽土御門順徳の三天皇を祭神として、今はそこに官幣中社が建つてゐるのだが、社の建物や境内の風致などは、立派な神社佛閣に富む此の地方としては、別にとりたてて記す程でもない。たゞ増鏡の物語を頭において、鎌倉の初期頃、こゝで當年の大宮人たちが四季をりくゝの遊宴を催した跡かと思ふと、一木一石にも、そゞろ心が動かされる。私は路傍に腰を掛けて一服吸つてから、廣くもあらぬ境内を何といふこともなく往つたり來たりした。そこは街道からはほんの僅か引込んでゐるだけだけれども、籬にとりくゝの秋草を咲かせた百姓家が點々と散らばつてゐる奥の、

見ゆたせは  
あまもと雨殿  
小無瀬川  
夕は秋と何をも困  
の敷  
いふもとかかす  
やまもと霞む水無瀬川  
の感興をおもらしになつたので

夏の頃云々  
増鏡おどろの下  
の中の一節。  
近き川 鮎云々  
源氏物語常夏の巻  
の一節  
近き川  
賀茂川  
西川  
桂川  
いしぶし  
沙魚のやうな川

閑静な、人の眼につかない、こぢんまりした袋のやうな地面なのである。でも後鳥羽天皇の御殿といふのはこれだけの狭い面積の中にあつたのではなく、こゝからずつとさつき通つて來た水無瀬川の岸まで續いてゐたのであらう。そして水のほとりの樓の上からか、またはお庭をそゞろ歩き遊ばされながら、川上の方を御覽せられて、やまもと霞む水無瀬川の感興をおもらしになつたのであらう。

夏の頃、水無瀬殿の釣殿に出でさせ給ひて、氷水めして、水飯やうのものなど、若き上達部殿上人どもに賜はさせて、大御酒參るついでにも、あはれ古の紫式部こそいみじくありけれ。かの源氏物語にも、近き川の鮎、西川より奉れるいしぶしやうのもの御前に調してと書けるなむ、すぐれてめでたきぞとよ。只今さやうの料理仕りてむや。など宣ふを秦のなにがしとかいふ御隨身

未末かん

拾はば云々  
源氏物語帯木の巻  
の「拾はば消えな  
むと見ゆる玉篠の  
上の霰。」とある。

男山八幡  
京都府綴喜郡八幡  
町にある官幣大社  
で、石清水八幡宮  
ともいふ。



天王山

高欄のもと近く候ひけるが承りて、池の汀なる笹を少し敷きて  
白き米よもぎを水に洗ひて奉れり。「拾はば  
消えなむ」とにや、これもけしがるわざ  
かな。とて御衣ぬぎてかづけさせ給ふ。  
御かはらけたびくきこしめす。  
とあるのを思ひ合はせれば、その釣殿の  
池の水が、やがて川の方に連絡してゐた  
のではないかと想像される。それに、こ  
こから南の方に當つて恐らく此の神社  
の後數丁ぐらゐの所には淀川が流れて  
ゐる筈ではないか。その流は今見えな  
いけれども、向岸の男山八幡おとやまのこんもり  
した峯が間に大河をさしはさんでゐるやうでもなく、つい眉の上  
へ落ちかゝるやうに迫つてゐる。わたしは眼を上げてその石清  
水の山影を仰ぎ、それとさしむかひに神社の北の方に聳えてゐる  
天王山の頂を望んだ。街道を歩いてゐる時は氣がつかかなかつた  
が、此處へ來てから四方を眺めると、私は今南北の山が屏風のやう  
に空をかぎつてゐる谷間たにあひの鍋の底のやうな地點に立つてゐる。  
なるほど、王朝の或時代に山崎に關所が設けられてゐたことも、西  
から京へ攻め入るのに此のあたりが要害の地であつたことも、か  
ういふ山河の形勢を見ると自ら合點されるのである。東の方の  
京都を中心とする山城の平野と西の方の大阪を中心とする攝河  
泉の平野とが、こゝで狹苦しくちぢめられてゐて、その間を一筋の  
大河が流れ行く。されば京と大阪とは淀川でつながつてゐるけ  
れども、氣候・風土はこゝを境界にしてはつきりと變る。大阪の人  
の話の聞くと京都に雨が降つてゐても、山崎から西は晴れてゐる

天王山  
京都市の南西にあ  
る山。山は餘り高  
くないが京都盆地  
の西口を守る要地  
で、天正十年(一五四  
)の山崎合戦の際、  
羽柴秀吉と明智光  
秀がこの地を奪ひ  
合ひ、遂に秀吉の  
手に歸して、明智  
方の總敗軍となつ  
たので名高い。

六 水無瀬懐古

ことがあり、冬など汽車が山崎を過ぎると、急に温度の下ることが分るといふ。さういへば所々に竹藪の多い村落の景色、農家の家の建て方、樹木の風情、土の色など嵯峨あたりの郊外と似通つてゐて、まだこゝまでは京都の田舎が延びて來てゐるといふ感じがする。

私は社の境内を出ると、街道の裏側を小徑傳ミチツトひに再び水無瀬川の川のほとりへ引返して堤の上にあがつて見た。川上の方の山のすがた、水の眺は、七百年の月日のあひだに幾分か違つて來たであらうが、それでも天皇の御製を拜してひそかに胸に描いてゐたものと、今眼前に見る風光とは、おほよそ似たり寄つたりであつた。私は大體かういふ景の所であらうと常から考へてゐたのである。それは峨々たる峭壁セウキヤクがあつたり、岩を嚙む奔湍ハシタケがあつたりするいはゆる奇勝とか絶景とかの稱に値する山水ではない。なだ

嵯峨  
京都市右京區にあ  
る勝地。

らかな丘と、おだやかな流と、それらのものを一層やんはりぼやけさせてゐる夕靄と、つまり、いかにも大和繪オホヤマトにありさうな温雅で平和な眺望なのである。なべて自然の風物といふものは見る人の心々であるから、こんな所は一顧ヒトのねうちも無いやうに感ずる者もあるであらう。けれどもわたしは雄大でも奇抜でもないかういふ凡山凡水に對する方が、却つて甘い空想に誘はれて、いつまでもそこに立ちつくしてゐたいやうな氣持にさせられる。かういふ景色は眼を驚かしたり魂を奪つたりしない代りに、人なつつこいほゝゑみを浮かべて旅人を迎へ入れようとする。ちよつと見ただけでは何でもないが、長く立止つてゐると、温かい慈母の懷に抱かれたやうな優しい情愛にほだされる。殊にうら淋しい夕暮は、遠くから手招きしてゐるやうなあの川上の薄靄の中へ吸ひ込まれて行きたくなる。それにつけても、夕べは秋と何思ひけむと

後鳥羽天皇が仰せられたやうに、もし此の夕暮が春であつて、あのおつとりとした山の麓に紅の霞がたなびき、川の兩岸、峯や谷の所に櫻の花が咲いてゐたら、どんなにか又温味が加はるであらう。思ふに天皇のお眺め遊ばされたのは、さういふ景色であつたに違ひない。だがほんたうの優美といふものは、たしなみの深い都會人でなければ理解出来ないものであるから、平凡のうちにも趣のあるこゝの風致も、昔の大宮人の雅懷みやのわいがなければなつまらないといふのが當然であるかも知れない。

私はおひく、夕闇の濃くなりつゝある堤の上に佇んだまゝ、やがて川下の方へ眼を移した。そして天皇が上達部や殿上人と御一緒に水飯を召しあがつたといふ釣殿はどのへんにあつたのだらうと右の方の岸を見渡すと、そのあたりは一面に鬱蒼とした森が生ひ茂り、それがずうつと神社の後の方まで續いてゐるので、そ

伏見  
京都市伏見區。

橋場・今戸  
何れも東京市淺草區。  
小松島・言問  
何れも東京市向島區。

の森のある廣い面積の全體が離宮の遺跡であることが明らかに指摘できるのであつた。のみならず、こゝからは淀の大川も見えてゐて、水無瀬川の末がそれに合流してゐるのが分る。忽ち私には離宮の占めてゐた形勝の地位がはつきりして來た。天皇の御殿は南に淀川、東に水無瀬川をひかへ、此の二つの川の交はる一角に據つて何萬坪といふ宏壯な庭園を擁してゐたに違ひない。いかさまこれならば伏見から船でお下りになつて、そのまゝ釣殿の勾欄コウランの下へトモイ纜をおつなぎになることも出來、都との往復も自由であるから、ともすれば水無瀬殿にのみ渡らせ給ひてといふ増鏡の本文と符合してゐる。私は幼年の頃、橋場今戸、小松島言問など、隅田川の兩岸に數寄をこらした富豪の別莊が水に臨んで建つてゐたことを圖らずも思ひ浮かべた。それに又情趣に乏しい隅田川などとは違つて、あしたにゆふべに男山の翠巒スエランが影をひたし、その

間を上り下りの船が行き交ふ大淀の風物は、どんなにか天皇のみ心を慰め、御ざしきの興を添へたであらう。後年幕府追討の計にやぶれさせ給ひ、隱岐の島に十九年の憂き年月をお送り遊ばされ、波の音、風の響にありし日の榮華をしのんでいらせられた時代にも、最も繁く御胸の中を往來したものは、この附近の山容水色と、この御殿でお過し遊ばされた花やかな御遊びのかずくではなかつたであらうか、などと追懷に耽つてゐると、私の空想はそれからそれへと當時のありさまを幻に描いて、管絃の餘韻、泉水のせせらぎ、果ては月卿雲客のほがらかな歡語のこゑまでが耳の底に聞えて來るのであつた。

(蕉 列)

七 蕉風と天明調

蕉風

雲雀より上にやすらふ峠かな  
草の葉を落つるより、飛ぶ螢哉  
閑かさや岩にしみ入る蟬の聲  
聲すみて北斗にひびく砧かな  
鶯の身をさかさまに初音かな  
黄菊白菊その外の名はなくもがな  
應應といへどたたくや雪の門  
涼風や青田の上の雲の影  
叱られて次の間に立つ寒さ哉

支 許 去 嵐 其  
考 六 來 雪 角

芭蕉 五頁頭註参照。

其角 姓は根本。俳人。江戸の人。寶永四年(一七二七)歿。年四十七。

嵐雪 姓は服部。俳人。淡路の人。寶永四年(一七二七)歿。年五十四。

去來 姓は向井。俳人。長崎の人。寶永元年(一七二四)歿。年五十四。

許六 姓は森川。俳人。近江彦根の人。正徳五年(一七二五)歿。年六十。

支考 姓は各務。俳人。美濃の人。享保十六年(一七四一)歿。年六十七。



八すがの荒野

八すがの荒野

吾

加藤千蔭

江戸の人。國學者。歌人。文化五年(三  
哭)歿、年七十五。

村田春海

江戸の人。國學者。文化八年(西七)歿、  
年六十六。

清水濱臣

江戸の人。國學者。文政七年(西四)歿、  
年四十九。

釋良寛

俗名小川作左衛門。越後國(新潟縣)の人。天保二年(西九)歿、年七十四。

香川景樹

因幡國(鳥取縣)の人。歌人。天保十四年(西三)歿、年七十六。

熊谷直好

周防國(山口縣)の人。歌人。文久二年(西三)歿、年八十一。

加納諸平

遠江國(静岡縣)の人。國學者。安政四年(西七)歿、年五十二。

大隈言道

筑前國(福岡縣)の人。歌人。明治元年歿、年七十一。

瑞枝さす葉廣くま樫露ちりて月おもしろき夜半にも  
あるかな  
加藤 千蔭

心あてに見し白雲はふもとにて思はぬ空に晴るる富  
士のね  
村田 春海

見渡せば根白高萱うら枯れて秋風さむし利根の川づ  
ら  
清水 濱臣

霞立つ長き春日を子供等と手毬つきつつ今日も暮し  
つ  
釋 良寛

富士の根を木の間木の間にかへり見て松のかけふむ  
香川 景樹

浮島が原  
熊谷 直好

うつし来て植ゑもまだせぬ吳竹にやがても月の宿り  
けるかな  
加納 諸平

雲かかるわたのみ中にあら潮を雨とふらせて鯨うか  
べり  
大隈 言道

親泣けば子さへ泣くなり世の中のせんすべなさも何  
もしらずて

八すがの荒野

五

橋曙覽

越前國(福井縣)の人。歌人。明治元年歿、年五十七。

井上文雄

江戸の人。歌人。明治四年歿、年七十二。

太田垣蓮月

京都の人。尼僧。歌人。明治八年歿、年八十五。

たのしみは草のいほりに菫敷きひとり心をしづめ居るとき  
潮のまてゐた砂地  
橋曙覽

井上文雄

すみだがは中洲をこゆる潮先に霞ながれて春雨の降る

太田垣蓮月

宿かさぬ人のつらさをなさけにておぼろ月夜のはなのしたふし

近松門左衛門

巢林子と號す。京阪の浄瑠璃及び狂言作者。享保九年(二三四)歿、年七十二。

五十三次

江戸から京へ東海道五十三次。南無諸佛分身

散子の目に今は黒星のからままでをしるす此の頃は此の六字を書いた。

打出の濱

近江國(滋賀縣)大津の湖岸

矢橋

大津から矢橋へ舟で湖水を渡す瀬田長橋をとほると遠まはり

姥が餅

近江國(滋賀縣)草津の宿の名物

みなくち鱒

近江國(滋賀縣)水口宿の名物

坂

立神坂。近江國(滋賀縣)土山より伊勢國坂下へ鈴鹿山脈を越す坂

九馬方三吉

近松門左衛門

これく御覽ぜ、打たしやんせ。これこそ五十三次を居ながら歩むひざ、膝栗毛馬。はいしい道中雙六。南無諸佛分身と書いた六字を六角の、散子は櫻木、花の都をまんなかに思ひく、のしるしを置いて、さらばこちから打出の濱。大津へ三里。こゝで、矢橋の舟賃が、出舟めせく、旅人の乗りおくれじとどさくさ津。御姫様よりまづ姥が餅。一口二口、みなくち鱒踊りこえ、坂へ越すのも散子次第。散子をふれく、ふるや鈴鹿を跡にさがれば負けまいとせきに關より龜山に、煙草火うちの石薬師。おつと桑名の舟わたし。吉田・二川・白須賀ちよいと越えて、新居今切、舟に召せく、蛤召せのはまぐりく、濱松まで舞坂三里な。のり掛川を飛びおりて、機嫌笑顔や、さあ日坂の蕨餅、腰なは何ぞ日本一の大井川。仕合は



鈴鹿 伊勢國(三重縣)鈴鹿郡關町。鈴鹿關のあつた處。  
 龜山 同郡龜山町。  
 石薬師 同郡石薬師村。  
 吉田 今の豊橋市。  
 二川 三河國(愛知縣)渥美郡大川町二川。豊橋の東南八軒。  
 白須賀 遠江國(静岡縣)濱名郡白須賀町。  
 新居 同郡新居町。もと關所があつた。  
 舞坂 新居舞坂の間四軒。そこ今切がある。明應七年(三三)の地震に切れて湖水が海に通じた。舞坂濱松間十二軒。日坂。  
 藤枝 遠江國(静岡縣)小笠郡日坂村。掛川の東八軒。佐夜中山の西の坂。

せよしの旅雙六里七里八里もたゞ一足に、さきへくと咲きかゝりたる藤枝岡部瀬戸の染飯、うつの山邊の十團子、ところくの名物買うて、お錢つくつく手鞠子にひいふうみいよ、府中江尻にすつとんく。とんと打つたる興津波、松原はるゝ膏薬買うて、月をすひ出せ清見寺。由井蒲原や吉原のはなの蒲焼、名物の鰻の膚沼津の宿。三島越ゆれば箱根へ三里。骰子目次第に關越ゆる、悪い目打てば手判を取りに元の京へ立歸る。合點か。おゝ呑み込んだ小田原外郎大磯平塚藤澤のさはりもなしに雙六のさいさきもよし、門出よし、道中早めてとつかはと急ぐ程が谷神奈川越え、川崎を越え、品川越え、まづ先駈のお姫様一番勝に勝色の花のお江戸に着き給ふ。一の裏は雙六のさいはひあり、喜びあり、慰みありける道中とどつと興にぞ入り給ふ。  
 お側の衆に囃されて、幼心の姫君かう面白い吾妻とは今までお

駿河國(静岡縣)志太郡藤枝町。  
 岡部 同郡岡部町。藤枝の北八軒。  
 瀬戸 藤枝と岡部の間、宿。この名物くちなし染の乾飯を瀬戸の染飯といふ。  
 うつの山邊 駿河國(静岡縣)安倍郡宇都山。十團子はこの名物。  
 興津 由井蒲原何れも(同國)庵原郡。  
 吉原 (同國)富士郡吉原町。  
 外郎 小田原の名物、痰の藥。元の禮部員外郎陳宗敬の傳へた。  
 とつか 神奈川縣相模國鎌倉郡戸塚町。  
 程が谷 今横濱市保土ヶ谷區。  
 大高 腰高と同じ。菓子器を盛る腰の高い。

れは知らなんだ。さあ〜往かう、早往かう。「やあ御座らうとおつしやるか。そりや、めでたいは〜。又もや御意の變らぬ間に、行列揃へ。」と立騒ぐ。お乳の人は勇みをなし、左様なら、ま一度大殿様お袋様とお盃。これも馬子殿お蔭ぢや、出來いた〜。そちには禮いふ、褒美やる、其處に待ちやや。」とさゞめき渡り、奥に御供し入りにけり。  
 馬方は遂に見ぬ金の間を、うそ〜と覗き廻れど、筵のほか踏みもならはぬ備後表。「え、此の座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりもこつちのうちがけつこでござる。」と獨り言して居たりけり。  
 お乳の人は大高にお菓子様々ぶんかうに盛り入れ、どれ〜三吉其處にか。まあ〜そちはけな者ぢや。道中雙六お目に向け、それ故に姫君様お江戸へござると御意なさるゝ。お上にも御機

けな者  
殊勝な者。  
三筋  
三百文。

嫌。これは御前のお菓子、有難う戴きや。お錢三筋買ひたい物買  
やや。ことにそちは通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳  
の人の滋野井に逢はうといや。見れば見る程よい子ぢやに、馬方  
させる親の身は、よくく〜であらう。」といと懇の詞の末、三吉つく  
づく聞きすまし、由留木殿の御内、お乳の人滋野井様とはお前か。  
そんならおれが母様。」と抱きつけば、「あゝ、こは慮外な。おのれが  
母様とは。馬子の子は持たぬ。」ともぎはなせば武者ぶりつき、引  
きのくれば縋りつき、何の無い事申しませう。わしが親はお前の  
昔の連れ合ひ、此の御家中にて番頭伊達の與作。其の子は私。此  
方様の腹から出た與之介はわしぢやはいの。父様は殿様のお氣  
に違うて、國をお出なされたは三つの時でおる覺え。杳掛の姥が  
咄には、「母様も離別とやらで殿様に御奉公、こなたを姥が養育し、父  
様に逢はせたらう思へども甲斐もない。母様の細工の守袋を證據

杳掛  
山城國(京都府)乙訓郡大枝村杳掛。京都より丹波に通ずる老坂即ち大江山の東の宿。

石部  
近江國(滋賀縣)甲賀郡石部町。

に、由留木殿のお乳の人、滋野井様と尋ねよ。」と懇に教へて、姥はお  
れが五つの年、ひさしう痰を煩うて、擧句に鳥羽の祭にいて、餅が喉  
につまつてつい死んでのけました。在所の衆が養ひで、やうく  
馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公します。これ守  
袋を見さしやんせ。何のうそを申しませう。お前の子に紛れは  
ない。外に望は何もない。父様を尋ね出し、一日たりとも三人一  
所に居て下され。みごと杳も打ちます。此の草鞋もわしが作  
つた。晝は馬を追うて、夜は杳打ち草鞋作り、父様、母様養ひませう。  
父様と一つに居て下され。拜みまする母様。」と取付き、抱き付き、  
泣き居たり。

お乳ははつと氣も亂れ、見れば見る程我が子の與之介、守袋も覺  
えあり、飛び附いて懷に抱き入れたく氣はせけども、あつあ大事の  
御奉公、養ひ君のお名の疵、偽つて叱らうか。いや、かはいげに、さう

奏者役  
殿へ執次の役。

も成るまい。まあちよつと抱きたい。あゝ、どうせう。」と、百千色の憂き涙雙つの眼にはたまちかね、咽び沈んで居たりしが、いやいや我が子ながらもさかしい者、偽つて眞まこととせず、母を心のきたない者と、さげしまるゝも情なし。譯を語つて合點させ、恥ぢしめて返さんものと涙のごうて氣をしづめ、「こゝへ來い、與之介。」と引寄せ、て兩手を取り、さても大きうなりやつたの。とても成人せうならば、侍らしう、なぜ尋常にも育たぬぞ。顔の道具、手足まで母はかうは生みつけぬ。美しい黒髪を、このやうに剃りさげて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞ。」とさめくゝと泣きけるが、これ、ものを合點しや。腹から生んだは生んだれども、今では子でも母でもない。あさましう成りさがつたを嫌うて云ふでは更々ない。こゝの譯をよう聞きやや。母はもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓。殿様の御慈悲にて夫婦になされ、與作殿は段々に奏者

追腹  
殉死。

御改易  
祿を取上げ籍を削  
らるゝ刑。

役番頭、千三百石までお取立、追腹ほどの御恩の家。其の間にそなたを設け、上には姫様御誕生。御内證のよしみにて、母が乳を上げまし、首尾さへよければ、そなたも今家老衆の子同然に、二番と下座に下らぬ人。情なや父様が江戸詰に大事の所を仕損ひ、切腹に極つた。なれども腹を切らせては、女房もお家に置かれぬ。時には、大事のお姫様の乳離れ、御病氣も出ればいかゞとて、母を其の儘残さう爲、父様の命助り、奉公構ひの御改易。其の時母も一緒にのけば、尤も夫婦の道は立つ。『お姫様の乳離れ、お苦しみをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰たがいつの世に報ぜん。残つて御恩を報じてくれ。』と父様のことわりゆゑ、第一は男のため夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたはいの。男の子は幼うても、御勘氣の末氣遣ひな。與作が子とばし言やんなや。さあ早う御門へ出や。あゝ、いかなる因果な生まれ性、現在我が子に馬追させ、男の行

方も知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乗つたとて、これが何になる事。」と聲を忍びに泣くばかり。

子は生まれつき賢くて聞き分けあるほど猶泣き入り、悲しい話を聞きました。さりながら常に姥が申したは、姫君様と私とは乳兄弟の事なれば母様にさへ逢うたらば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかし。」といへば、ちやつと口おさへ、あゝ、勿體ない。其の乳兄弟言はぬこと。姫君様は關東へ養子嫁子にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間體。三吉と云ふ馬道が乳兄弟にあるなどと、どう妨けにならうやら。蟻の穴から堤も崩れる。軽い様で重い事。ひそく、言うて人も聞く。まづ早う出てくれ。」と泣く、云へば、あゝ、母様あんまり遠慮過ぎました。先づ言うて見て下され。」まだ言ひ居るか、聞き分けない。夫の事、我が子の事、母に如才があるものか。合點の惡

蟻の穴云々  
「千丈ノ堤蟻ノ穴  
ヲ以テ潰ユ」  
(韓非子)

まつべて  
まとめての俗語  
か。

い、聞き分けない。」と制するうちに奥よりも、お乳の人はどこにぞ。御前から召します。」と呼ばはれば、あれ聞きや。人が来る。出たも。」と手を取つて引きいだす。

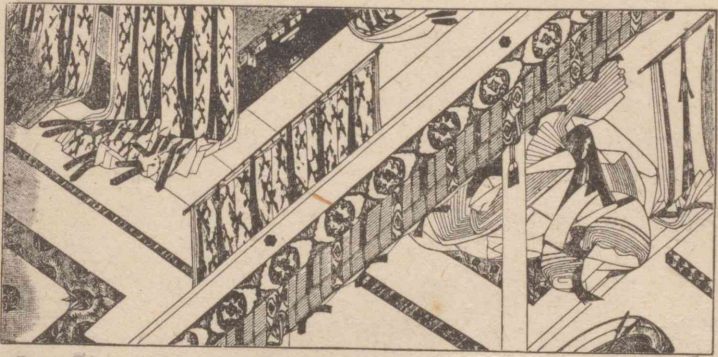
不便や三吉しく、涙、頬冠して目を隠し、杳見まつべて腰に附け、見すばらしげな後影、こりや、ま一度こちらむきや。山川で怪我しやんな。雨風、雪ふり、夜道には、腹が痛い、と作病おこし、二日も三日も休んで、煩はぬ様にしてたも。毒な物食はずに、腹や癩疹かの用心しや。可愛のなりや、いたくしや。千三百石の代取とりが何の罰ぞ、咎めぞ。」と、式臺の段箱に身を投げ伏して歎きしが、懷中の有合あひ一步十三、袱紗ふくさに包み、これ、たしなみに持つて居や。」と涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めしげに、母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬおかまひ。其の一步もいらぬ。馬方こそすれ、伊達の與作が總領ぢや。母様でもない他人に金貰はう筈が

たしなみ  
用意。





卯の花  
うつぎの花。灌木にて、初夏に白き花、枝頭にむらがり咲く。



部一の巻繪子草枕

たるもいとつきくし。晝になりてぬ  
るくゆるびもてゆけば炭櫃火桶の火も  
白き灰がちになりぬるはわるし。

二木の花

木の花は梅濃くも薄くも紅梅櫻  
の花びら多きに葉色濃きが枝細くて咲  
きたる。藤の花しなひ長くよく咲きた  
るいとめでたし。卯の花は品劣りて何  
となけれど咲く頃のをかしう杜鵑の陰  
に隠るらんと思ふにいとをかし。祭の  
かへさに紫野のわたり近きあやしの家  
どもおどろなる垣根などにいと白う咲  
きたるこそをかしけれ。青色の上に白

橘

幹は高さ三米餘に達す。葉は單葉互生し、香氣を發す。花は白色、果實は黄色。



き單がさねかづきたる青朽葉などに  
の晦五月の朔などの頃ほひ橘の濃く青きに花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは世になく心あるさまにをかし。花の中より實の黄金の玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露に濡れたる櫻にも劣らず、杜鵑のよすがとさへ思へばにや、なほ更にいふべきにもあらず。  
梨の花世にすさまじくあやしきものにして、目に近くはかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひにいふもげにその色よりして愛なく見ゆるをもろこしに限りなきものにて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば花びらのはしに、をかしき句こそ、心もとなくつきためれ。さてなほいみじうめでたきことはたぐひあらじと覺えたり。  
桐の花紫に咲きたるは、なほをかしきを、葉の廣がりざまうたて

反經

あれど、又他木どもと、ひとしう言ふべきにあらず。唐土にことごとしき名つきたる鳥の、これにしも住むらん、心ことなり。まして琴に作りてさまなる音の出でくるなど、をかしとは世の常にいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。

木のさまぞにくげなれど、樗の花いとをかし。かれ花に様ことに咲きて、かならず五月五日にあふもをかし。

うつくしきもの。瓜にかきたるちこの顔。雀の子のねずなきするにをどりくる。又へにつけてすゑたれば、親雀の蟲など持て

来てくむる、いとらうたし。三つばかりなるちこの急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし

尼にそぎたるちこの、目に髪のおほひたるを搔きは遣らで、うち傾

樗  
落葉喬木。庭園・路傍に栽植す。高さ約十米に達し樹皮は黒色なり。四五  
月頃白色又は淡紫色の花を開く。球形又は橢圓形の核果を實ぶ。



二 藍  
染色の名。べに花と藍とで染めた色。

きて物など見る、いとうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちこのあからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寝入りたるもらうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいとちひさきを、池より取りあげて見る。葵のちひさきもいとうつくし。何もくちひさきものは、いとうつくし。いみじう肥えたるちこの二つばかりなるが、白うつくしきが、二藍のうすものなど、衣ながくてたすきあげたるが、這ひ出でくるもいとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲幼げにて文よみたる、いとうつくし。鶏の雛の足高に、白うをかしげに、衣短なるさまして、ひよくとかしがましく鳴きて、人の後に立ちてありくも、又親のもとに連れだちありく、見るもうつくし。雁の子。舍利の壺。瞿麥の花。

(続 草子)





るを嬉しきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。  
 前栽の花いろく、咲きみだれ、おもしろき夕暮に、海見やらる、  
 廊に出で給ひて、たゞずみ給ふ御様のゆゑ、しう清らなること、とこ  
 ろからは、ましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよ、  
 かなる、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帯しどけなく打亂  
 れ給へる御様に、て、釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、ゆるゝかに讀み  
 給へる、また世に知らず聞ゆ。沖より、舟どもの唄ひの、しりて漕  
 ぎ行くなども聞ゆ。ほのかにたゞ小さき鳥のうかべると見やら  
 るゝも心ぼそげなるに、雁の連ねてなく、聲、梶の音にまがへるを打  
 眺め給ひて、御涙のこぼるゝをかきはらひ給へる御手つき、黒木の  
 御數珠にはえ給へるは故郷戀しき人々のこゝち、みな慰みにけり。  
 (源氏物語)

伊勢物語

二卷。著者未詳。主として在原業平の行跡を記した歌物語。在原業平は阿保親王の第五子。六歌仙の一人。元慶四年(西暦884年)歿。年五十六。

都鳥

隅田川に住む一種のかかもめ



八橋

三河國(愛知縣)にある

燕子花



一二都鳥

鳥

伊勢物語

昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方にすむべき國もとめにとて、行きけり。もとより友とする人、一人二人していきけり。道しれる人もなくて、惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つ渡せるによりて、なん八橋といひへる。その澤の邊の木の陰におりゐて、餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見て或人の曰く、かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心を詠め」といひければ、詠める。  
 唐衣きつ、馴れにしつましあれば  
 はるく、來ぬる旅をしぞ思ふ(折句といふ)

宇津の山  
駿河國(静岡縣)安  
倍郡と志太郡との  
間にある。



鹽尻

あつたに今も  
現に今も  
昔も今も

と詠めりければ、みな人餉の上に涙落してほとびにけり。  
行きノ、て駿河の國にいたりぬ。宇津の山に至りて、我が入ら  
んとする道は、いと暗う細きに、蔦楓はしげり、もの心ほそくすゝる  
なるめを見る事と思ふに、修行者あひたり。「かゝる道は、いかでか  
いまする。」といふに見れば、みし人なりけり。京にその人の御許  
にとて、文かきて、つく。

夢にも人に逢はぬなりけり

富士山を見れば、五月のつごもりに雪いと白う降りり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか

かのこまだらに雪の降るらん

この山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたら  
ん程して、なりは鹽尻のやうになんありける。

角田川  
隅田川。

角田川  
隅田川  
武蔵  
下總

猶行き行きて、武蔵の國と下總の國とのなかに、いと大いなる河  
あり。それを角田川といふ。その川の邊にむれゐて思ひやれば、  
かぎりなく遠くも來にけるかなと、わびあへるに、渡守はや舟に乗  
れ、日も暮れなん。」といふに、乗りて渡らんとするに、皆人ものわび  
しくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と  
脚と赤き、鳴の大ききなる、水の上にあそびつゝ、魚をくふ。京には  
見えぬ鳥なれば、みな人えしらず。渡守に問ひければ、これなん都  
鳥。」といふを聞きて、  
名にしおはばいざこと問はん都鳥  
わが思ふ人はありやなしやと  
と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

(伊勢物語)

竹取物語

二卷。作者未詳。  
我が國假名文の物  
語の最初のもの。

一三 かぐや姫

竹取物語

春の初よりかぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。或人の「月の顔見るは忌むこと。」と制しけれども、ともすれば、人間には月を見ていみじく泣き給ふ。

七月の望の月に出でゐて、せちに物思へるけしきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫、例も月をあはれがり給ひけれども、この頃となりては、たゞごとにも侍らざめり。いみじく思し歎くことあるべし。よくく見奉らせ給へ。」と言ふを聞きて、かぐや姫にいふやう、なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ、うましき世に。」と言ふ。かぐや姫、月を見れば、世のなか心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき。」といふ。かぐや姫のある處に到りて見れば、なほ物思へるけ

しきなり。これを見て、あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ。」といへば、思ふこともなし。物なむ心細く覺ゆる。」といへば、翁、月を見給ひぞ。これを見給へば、物おぼすけしきはあるぞ。」といへば、「いかでか月を見ずにはあらむ。」とて、なほ月出づれば、出で居つゝ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月の程になりぬれば、なほ時々は打歎き泣きなどす。これを見て、使ふものども、なほ物おぼす事あるべし。」とさゝやけど、親を始めて何事も知らず。

八月の望ばかりの月に出でゐて、かぐや姫といたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも「何事ぞ。」と問ひ騒ぐ。かぐや姫泣くくいふ、さきくも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。さのみやはとて打出で侍りぬるぞ。おのが身はこの國の

人にもあらず、月の都の人なり。それを、昔の契ありけるによりてなむ、この世界にはまうで来りける。今は歸るべきになりにつれば、この月の望に、かの本の國よりむかへに人々まうで来むず。さらずまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。」といひて、いみじう泣く。翁、こはなでふ事をのたまふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、菜種の大きさはおはせしを、わが丈たち並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや。」といひて、われこそ死なぬ。」とて、泣きのしること、いと堪へ難げなり。かぐや姫のいはく、月の都の人に、て、父母あり。片時の間とてかの國よりまうで来しかども、かくこの國には數多の年を経ぬるになむありける。かの國の父母の事もおぼえず、こゝにはかく久しく遊び聞えてならひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど、おのが心なら

ず罷りなむとする。」といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人も、年頃ならひて、立別れなむ事を、心ばへなどあてやかに、美しかりつることを見ならひて、戀しからむ事の堪へ難く、湯水も飲まれず、同じ心に歎かしがりけり。

かぐや姫、天に昇るべきもちの日、六衛のつかさはせて二千人、竹取の翁が家にまかる。築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々も多かりけるに合はせて、あける隙もなく打守る。この守る人々、弓矢を帶して居り。母屋の内には、女どもして守らす。嫗、塗籠の内にかぐや姫を抱きて居り。翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。翁のいふ、かばかり守る所に、天の人にも負けんや。」といひて、屋の上に居る人々に、いはく、つゆも物そらにかければ、ふと射殺し給へ。」守る人々のいはく、かばかりして守るところに蝙蝠一つだにあらば射殺してん。」といふ。翁これを聞きて、たのもしがりて居

りけり。これを聞きて、かぐや姫は「さしこめて守り闘ふべきたく  
 みをしたりとも、あの國の人とは得たゝかはぬなり。弓矢して射  
 られじ。かくさしこめてありとも、彼の國の人々は皆あけなん。  
 闘はんとすとも、彼の國の人來なば、たけき心つかふ人もよもあら  
 じ。」翁のいふ様、御迎へに來ん人をば、長き爪して眼をつかみつぶ  
 さん、逆髪をとりてかなぐり落さん。」とはらだち居り。かぐや姫  
 いはく、「聲高になのたまひそ。屋の上に居る人どもの聞くにいと  
 まさなし。親たちのかへりみを聊かだにつかうまつらで、まから  
 ん道もやすくもあるまじ。さる處へまからんとするも、うれしく  
 侍らず。おい衰へたまへる様を見奉らざらんこそこひしからめ。」  
 といひて泣く。

かゝる程に、宵うち過ぎて子の時ばかりに、家のあたり晝の明る  
 さにも過ぎて光りたり。望月の明るさを十あはせたるばかりに

て、在る人の毛の孔さへ見ゆる程なり。大空より、人、雲に乗りて降  
 り來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ちつらねたり。これ  
 を見て内外なる人の心ども、ものに襲はるゝやうにて、相戦はむ心  
 もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を執りたてむとすれど  
 も、手に力もなくなりて、痿えかゝまりたる中に、心さかしきもの、念  
 じて射むとすれども、外さまへ往きければ、あれも戦はで、心地たゞ  
 しれにんして守りあへり。

立てる人どもは、装束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ  
 具したり。羅蓋らがいさしたり。その中に王とおぼしき人、家に「造麻呂みやつこまろ  
 まうで來。」といふに、猛く思ひつる造麻呂も、物に酔ひたる心地し  
 て、うつぶしに伏せり。曰く、「汝をさなき人、聊かなる功德を翁つく  
 りけるによりて、汝が助にとて片時のほどとて降ししを、そこの  
 年ごろ、そこの金賜こがねひて、身を更へたるが如くなりたり。かぐ

造麻呂  
 竹取翁の名。

や姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許に暫しおはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く、能はぬことなり。はや返し奉れ。」といふ。翁答へて申す、「かぐや姫を養ひ奉ること二十年餘りになりぬ。片時と宣ふに、怪しくなり侍りぬ。又他處にかぐや姫と申す人ぞおはしますらむ。」といふ。「こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまし。」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車を寄せて、「いざ、かぐや姫、穢なき處にかでか久しくおはせむ。」といふ。たて籠めたるころの戸、即ちたゞあきにあきぬ。格子どもも、人はなくしてあきぬ。姫抱きてゐたるかぐや姫、外に出でぬ。えとゞむまじければ、たゞさし仰ぎて泣き居り。

竹取心惑ひて泣き伏せる處に寄りて、かぐや姫いふ、「こゝにも、心にもあらでかく罷るに、昇らむをだに見送り給へ。」といへども、何

しに悲しきに見送り奉らむ。われをば如何にせよとて、捨てては昇り給ふぞ。具して率ておはせね。」と泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。「文を書き置きて罷らむ。戀しからむをりく、取出でて見給へ。」とて、打泣きて書くことは、「この國に生まれぬとならば、歎かせ奉らぬ程まで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬる事返すく、本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎ置く衣を形見と見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見捨て奉りて罷る空よりも落ちぬべき心地す。」と書き置く。

天人の中に持たせたる筥あり、天の羽衣入れり。又あるは不死の薬入れり。一人の天人いふ、「壺なる御薬奉れ。穢き處の物聞し召したれば、御心地あしからむものぞ。」とて持て寄りたれば、些か嘗め給ひて、少し形見とて、脱ぎ置く衣に包まむとすれば、ある天人包ませず、御衣を取出でて着せむとす。その時に、かぐや姫、暫し待

て。」といひて、衣着つる人は心異になるなり。物一言いひ置くべきことあり。」といひて文書く。

やがて天人、天の羽衣着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひも無くなりにつれば、車に乗りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。その後翁、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書き置きし文を讀みて聞かせけれど、「何せむにや命も惜しからむ。誰が爲にか何事も益もなし。」とて、やがて起きも上らず病み臥せり。

(竹取物語に據る)

萬葉集

二十卷。撰定年代及び撰者未詳。我が國最初の歌集。仁徳天皇の頃から淳仁天皇の御宇に至るまで約四百年間の和歌が収められてゐる。

額田王  
鏡王の女。

柿本人麿  
持統・文武兩天皇の朝に仕へた歌人。傳未詳。

一四 萬葉集抄

春秋を競はしめ給ふ時

額田王

冬ごもり春さり來れば 鳴かざりし鳥も來鳴きぬ  
開かざりし花も開けれど 山を茂み入りても取らず  
草深み取りても見ず 秋山の木葉を見ては 黄葉  
をば取りてぞしぬふ 青きをば置きてぞ歎く  
こし恨めし秋山吾は

吉野宮に幸ませる時

柿本人麿

安見ししわが大君 神ながら神さびせすと 吉野  
川瀧つ河内に 高殿を高知りまして 上り立ち國  
見をすれば 山つみの奉る御

八陽知人

落不が天下を...

調と 春べは花かざし持ち 秋立てば紅葉かさせ

り 逝き副ふ川の神も 大御食に仕へまつると

上つ瀬に鵜川を立て 下つ瀬に小綱さし渡し

川も依りて仕ふる 神の御代かも

山川もよりてつかふる神ながらたぎつ河内に船出せず

山部赤人 聖武天皇の頃の歌人。傳未詳。

望不盡山歌

山部 赤人

天地のわかれし時ゆ 神さびて高く貴き 駿河な

る富士の高嶺を 天の原ふりさけ見れば わたる

日の影もかくろひ 照る月の光も見えず 白雲も

い行きはばかり 時しくぞ雪はふりける 語りつ

ぎいひつぎ行かむ 富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞふじの高嶺に雪

思子等歌

山上 憶良

瓜はめば子ども思ほゆ 栗はめばましてしぬばゆ

いづくより來りしものぞ まなかひにもとなかゝり

て 安寝しなさぬ

反歌

白金も黄金も玉もなにせむにまされる寶子にしかめや

山上憶良 元明・元正・聖武の諸天皇の朝に仕へた歌人。天平五年(七三三)歿、年七十四。



あしびきの山河の瀬の鳴るなべにゆづきが嶽に雲たち  
わたる 柿本人麿

み吉野の象山きさやまのま際まの木末こぬれにはここだも騒ぐ鳥のこゑか  
も 山部赤人

いはばしる垂水たるみの上のさわらびのもえいづる春になり  
にけるかも 志貴皇子

吉野なる夏實なつみの河の川よどに鴨ぞ鳴くなるやまかげに  
して 湯原王

志貴皇子  
天智天皇の皇子。

湯原王  
志貴皇子の御子。  
傳未詳。

大伴旅人  
安麿の子。元明・  
元正・聖武の諸天  
皇の朝に仕へた歌  
人。天平三年(元  
二)歿。

大伴家持  
旅人の子。聖武天  
皇より桓武天皇に  
至る六天皇の朝に  
仕へた歌人。延暦  
四年(四四)歿。

海犬養岡麿  
奈良朝時代の歌  
人。傳未詳。

あわ雪のほどろほどろに降りしけば平城ならのみやこし念  
ほゆるかも 大伴旅人

ますらをは名をし立つべし後の世に聞きつぐ人も語り  
つぐがね 大伴家持

御民吾れ生けるしるしあり天地のさかゆる時にあへら  
く思へば 海犬養岡麿

芳賀矢一  
文學博士。國文學者。福井市の人。

昭和二年歿、年六十一。

古事記

三卷。神代より推古天皇の御世までの歴史。元明天皇の和銅五年(七二〇)に太安麿の撰したもの。

日本紀

三十卷。日本書紀。神武天皇より持統天皇までの事蹟を漢文で記した歴史。養老四年(元)倉人親王・太安麿等の勅を奉じて撰したもの。

一五 日本文學概観

芳賀 矢一

優美閑雅な日本語を使つて、平和柔順な國民が歌つた歌、それには長歌も短歌もあるが、此等の歌が日本文學の基礎といつてよるしい。四圍の美しい自然を歌つて、人事もすべて自然の譬喩に寄せられて居ることが、早く後世の文學の特質を示して居る。古事



一 矢 賀 芳

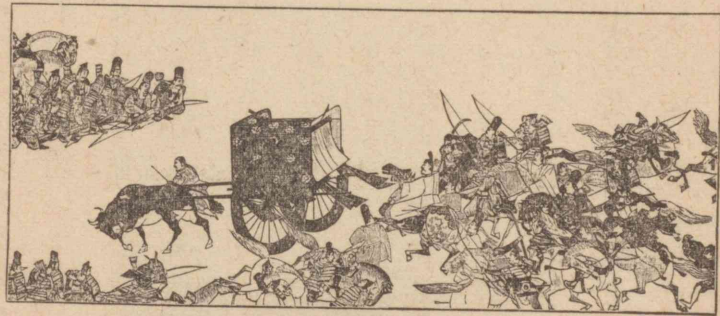
記・日本紀の歌、萬葉集の歌等は即ち其等の國民歌の幾分かを傳へたもので、推古以來支那の文明が傳はつて、段々と漢文漢詩が用ひられるやうになつても、日本固有の歌はそれとは別途に發達した。殊に上代からの神祇を祭る詞、祝詞の形式を應用して、寧ろ漢詩に

對抗して、特殊の國民思想を歌つたのが柿本人麿・山部赤人等の先輩歌人で、續いて奈良時代の大伴家持である。萬葉集には漢文渡來以前の歌も多く載せてあるが、かういふ新進歌人等の歌も多い。優美・典雅といふ點に於て、忠君愛國の思想に於て、よく日本國民の上代思想をあらはしたものである。

奈良時代に出來た萬葉集は漢字を以て記された。漢字の音訓を用ひて日本語を記したのである。平安朝になつて百餘年の間に、假名の發達があつて、平假名で自由自在に國語を記すことになつた。是に於て假名文の發達が著しくなつた。萬葉集の後をついで、古今集以下の勅撰和歌集が出來たのみでなく、竹取物語・伊勢物語を物語の祖として、數多の假名物語・日記・隨筆の類があらはれた。就中有名なのは紫式部の源氏物語と清少納言の枕草子で、漢學の素養が文藻を助けたことは見逃されぬことであるが、上古以

古今集以下の勅撰集

古今・後撰・拾遺・後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今等の和歌集をいふ。



部一の巻繪物語平治

來行はれた和歌の風流が、常に此等の文學の背景となり、基礎となつて居るのは争はれぬ事實である。大鏡や榮華物語などいふ史實を記した物語も、つまりは其の材料を一轉化したのである。奈良時代の和歌即ち抒情詩が、平安時代には物語即ち敘事詩と發達したのである。

鎌倉幕府の創立と共に時代は一變した。随つて文學も一變した。源平二氏の争が材料に採られた保元物語や平治物語や源平盛衰記などといふ軍記物語が、佛家の諸行無常、愛別離苦の思想の下に筆述せられた。降つて吉野朝廷の頃の太平記も同じ

く軍記物語である。平安時代の盛時とは其の材料に於てこそそれぞれ差別はあれ、敘事詩たる事は同様である。材料の變化と共に、言語も變化して、漢語及び漢文脈の加はつて來た事は、自ら其の内容と外形との調和を保たしめて居る。徒然草、方丈記なども、佛敎の深い感化から生まれた此の時代の著名な産物として數へられる。

足利將軍の世は概して戰亂時代で、無學の世と稱せられて居るが、明朝との交通も繁く、繪畫をはじめ美術工藝の進歩も著しく、鎌倉の末からの進歩を受けて、將軍義滿の頃に至つて、能の發達大成を見るに至つたのは大いに注意すべき事である。平安・鎌倉二時代を通じての敘事詩は、此に至つて劇詩の形をなしたのである。能は其の後、徳川時代を通じて衰へず、今日に傳はつて尙盛んであるのを見ても、如何に我が國民の嗜好に投じたものであるかが分

る。其の材料としては、上代の萬葉集から、中古の古今集伊勢物語、源氏物語等は勿論、平家物語、源平盛衰記、また義經記、會我物語などの軍記物語に及んで居り、また世話材料も入れてある。歌ふ方から言つても、舞の方から言つても、出来るだけ當時の粹を抜いたものでむしろ其の精華を集めたものと言つてもよい。あらゆる美術の方面を集大成したものととして、當時の武士の修養に資したことは多大であつた。

徳川時代に至つては、學問の復興から、漢學が更に唐宋時代の精華を學んだのは勿論、儒學に於ては支那に於ても稀な程な大儒が輩出した。又國學の研究も盛んになつて、久しく忘れられて居つた平安時代以前に遡つて、萬葉集も研究せられ、源氏物語も研究せられた。印刷の方法も進んで、古書の翻刻が盛んになつて、庶民皆太平の世を楽しんで、靜かに文學を翫味するの餘裕を得た。漢學

近松門左衛門

巢林子と號す。京

阪の淨瑠璃及び狂

言作者。享保九年

(一七二四)歿、年七十

三。

曲亭馬琴

通稱は瀧澤解。小

説家。江戸の人。

嘉永元年(一八二〇)

歿、年八十二。

國學の勃興につれて、専ら平民社會に行はれた所謂俗文學が發達した。淨瑠璃や小説や俳句や狂歌や川柳やが、和漢古今の文學に根ざし、新しい國民思想の花を咲かせた。昌平時代の樂天洒落な氣風と、義理人情に勇み立つ犠牲的精神とが、此等各種の文學の上に溢れて居る。綱吉將軍の元祿時代と、家齊將軍の文化・文政時代とが、其の最大繁盛な時世であつた。淨瑠璃の近松門左衛門、俳句の芭蕉は元祿の世に屬し、小説の曲亭馬琴は文化・文政の世に屬する。其の他作家は數限りもない。平民社會の嗜好に投じた爲、中には材料・思想に鄙陋なもの、尠くないのは遺憾である。演劇の發達の著しかつたことも注意すべき事柄である。かやうに平民文學の發達したのは、一面に於て平民社會の勃興を意味するので、日本の國民が東洋の諸國中、明治・大正の御代を待つて大いに世界に活躍するといふ氣運が、已に其の上に示されて居る様に感ぜら

れる。

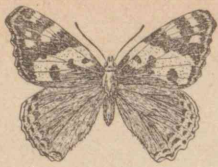
維新以後の進歩は、ひたすら西洋文學の新味を加へたことで、西文明の融和は我が國文學の上に於てもいち早く認められるのである。最初は平易な英文の小説詩歌の翻譯から始つて、次第に佛獨露瑞諸國の文學を咀嚼するに至り、歐米の新思潮は抒情詩・敘事詩・劇詩の各方面にわたつて、常に新しい傾向・生命を我が文學の上に及ぼしつゝあるのである。上古以來の國文學の研究も益々盛んになつて、一層根柢あり、權威あり、價值ある文學の興るのは近き將來に期待せらるべきことである。但し新奇を競ふの餘り、往々我が國體と相容れず、我が國民性と扞格する思想の輸入せられることもあるので、其の間の調節は大いに考慮しなければならぬのである。

一六 冬から春へ

水野葉舟

一月——「凍りの季節の頂點に上りつめてゐる時、凍てて、こゝろ切つてゐる土は、何の働きもしないやうに感じられる。木の枝も根の先もすくんで眠り入つてゐる。生まれる一切の卵はすつかり凍りに閉ぢこめられて、まだ呼吸を始めない——凍つた休眠の絶頂の時である。

その寒のうちだといふのに林のふちの日溜りの芝生から、ふいとアカタテハが飛び立つて強さうな翼で舞ひ上つた。どこか、落葉のつもつた下にひそんでゐた蛹が、いつとなしに溜つた熱に欺かれて、生まれたのらしい。今夜の寒さにはこゝろえてしまふ生命だ。それでも種子が目を感じずあの奇蹟の暗示が、恐しいやうな力で感じられる。



アカタテハ

水野葉舟  
詩人。千葉縣三里  
塚に歸農。東京市  
の人。明治十六年  
生。



イヌノフグリ

この凍つた土の中から、福壽草の苞につままれた芽がおのづから頭を出し始めてゐる。梅の蕾が柔らかくふくらみかけて、萼がみづくしくなつてゐる。道を歩いて行くと路傍の溝の上で土埃をかぶつてゐながら、イヌノフグリが日向がさもく嬉しさうに鮮やかな空色の花を開いてゐる。年を越した蔬菜畑の菜は、葉が凍つて焼けてしまつてゐるが、その心に花の蕾を立てて、それをまはりの霜焼から残つた葉がじつと守つてゐる。

この絶頂の時の間に、空では息をつくやうに凍り切つたり緩んだりしてゐる。一日思ひがけない「みなみ」が吹いて、すっかりかげ解けがしてしまつた。と思ふと、その風が北西にまはつて、次の朝はざく／＼するほどの霜柱だ。

「お寒うございます。今朝はえれえ、大霜で……」といつて、村の人

達が、白い息を吐きながら朝の挨拶をしあつてゐる。

この寒さの中で、林で騒がしく鳴いてゐるのは鶉と懸巢だ。畑に群れてゐるのは鳥と椋鳥だ。鶉は林の中をくゞり、木のてつぺんに止つては叫び聲をたててゐる。寒い風に向つて叫び鳴く。懸巢は林の中に身をかくしてゐながら脅かすやうな聲で鳴く。もみあつてゐるやうな椋鳥のおしやべりが、黒い群になつて、突風の音のやうな羽ばたきをたてて畑から畑へと渡り歩いてゐるのを見ると、雨の来る前だと感じられる。鳥は魔物のやうに翼をひろげて、ひらく／＼人氣のない畑を襲つて歩いてゐる。

まだ大抵の鳥は歌を忘れてゐる。

雲雀が鳴かないで畑の中を早足に歩いてゐる。時たま、日向の木の枝でからだをふくらましてゐる赤腹が、小さな聲でぐぜりをやつて居るのが聞えるが、それはほんとに稀な穏やかな日の日盛

りの時刻だ。この季節に風のない日は稀なのだから。この凍りの日がずつと續いて節分がすぎる。そして日がたつうちに、日光の色が少しづつ白く強まつて行くのを、はつきり見わける事は殆ど出来ない。その「凍り」の絶頂が動き始めた。極く微かな動きの初の變化は、目で見わけるのはむづかしい。晴れた穏やかな日に、肌が微かに日の暖かさの度の違ひを感じる事がある。霜と氷とで明けて、くれるとまた霜と氷とが變りなく續いてゐるのだが、その不變の凍りの中に、微かに燃えかゝつて来る熱が交つて感じられるのである。その熱が不思議な新しさで眠つてゐる肌と心とを刺激する。——だがすぐ寒い風がそれを吹き消してしまふ。そして目は變らないのろい／＼眠りを見てゐる。

寒の明けから三四日目の或日。穏やかな晴の午近くの、日光の溜つてゐる時刻に、暖かい林の方からふいと河原鶉の高音が聞え

て來た。二聲、三聲、四聲、どこかやゝ高い枝に止つてゆつくりかまへながら聲を張り上げて鳴いてゐる。日光の、その燃えかゝる熱を鋭敏に感じてつい催されて鳴き始めたに違ひない。その前の日は晴れ、寒さ烈しく凍て切つてゐる。風強し。で、凍り切つた西風が吹きとほしてゐた。小鳥たちはどこかの林の茂みに逃げこんでゐて姿を見せなかつた。その日は穏やかであつたが、寒い家の中の水まで氷つてゐる。霜ひどし。土凍てはててゐる。日であつた。しかし日光の熱を吹き散らす風がないので、あの微かな「白い光」がいろ／＼の生きものに感じられたに違ひない。それでその河原鶉は、ついうつとりなつてあのいゝ氣持の高音をあげたのだ。

それを聞いた人は、ちよつと目を見張つて、——鶉が高音をあげてるぞとひとりごとをいつた。あの感じたと思ふと消えていつ

てしまふ熱、凍りの中ににじみこんで来てゐる熱を、この小鳥の聲で、まぎ／＼目に見るやうに感じたのであつた。

その日きりで、河原鵜の高音はまた幾日も聞えて來ない。空の中には少しも變らず嚴として「凍り」の力が動かない。水の氷る夜がつゞいてゐる。或朝には、村の人たちがカザハナといつてゐるばら／＼とふり撒いたやうな霰が降つた。折角、目を少し大きく見開いてじつと熱の強い光を送り始めた太陽が、また目を細めてしまつたやうだ。

と思つてゐると、或日、低い雲が空いつぱいにはびこつて、しとしとと雨が降つて來た。さうするとこの低い雲と土との間に、ぼうつと生暖かい暖かさが漲つて來た。土の上の霜はすつかり溶けてしまつた。その次の日は晴れ上つたが、むら／＼した重い雲がもの／＼しく低い空を流れて行く。そしてきのふからの暖かさ

がそのまゝ土の上に溜つてゐる。

すると、林の低い枝に來て、鶉が面白さうに舌をころがしてなきをやり出した。からだをゆつたりさせて心で何かを樂しんでゐるやうなうただ。一つ處に止つてゐながら、そのうたを幾度も繰り返してゐる。

凍り切つた冬の絶頂がずり出したのだ。熱が流れこんで來たのだ。これから空の上で一日々々と熱と凍りとの闘ひが始まる。かう言つて誰かに向つてその感じを話しかけようとしたくなる。

おや雲雀？——この同じ日に庭を歩きながらあの口早の歌が耳に傳はつて來たので、驚いて空を見た。今までもまるで氣がつかないでゐたが……この雲雀の聲は今初めて舞ひ上つた鳴き聲とは思はれない。もうこの鳥はとつくに鳴き始めてゐたのだ。

夜曇つて霜のおりない朝。ひどく暖かな蒸すやうな夜。そし



て晴れの日がつゞく。

穏やかに静まり切つてゐた午がすぎると、不意に風が流れ出した。南西。その風がだんく、大きい流になつてゆく。洪水のやうな凄しい音。林がうなる。そして日がくれるまで吹きとほしてゐた。夜が更けてからしみ透るやうな寒さが来た。次の朝になつて見ると、汲み上げてあつた水がすっかり氷つてしまつてゐた。

霜。寒さが牙え返つたやうに朝になつてしまつた。しかし朝の光ははれやかだ。その中を徹る明るい聲で目白が鳴いて飛んでゐる。梅林から山の中へと四十雀の一群がとち狂つてふざけて行く。その仲間の雄が時々ゆるりとした調子でやさしい高音をあげる。この朝日の中に小鳥たちが賑やひながら林から庭へ集つて来る。

(村の無名氏)

島崎藤村

名は春樹。詩人。小説家。長野縣の人。明治五年生。

小諸

長野縣北佐久郡小諸町。

一七 藤村詩抄

島崎藤村

一千曲川旅情の歌

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ

緑なす蘘萋はこべは萌えず

若草も藉くによしなし

しろがねの衾の岡邊

日に溶けて淡雪流る

あたたかき光はあれど

野に満つる香りも知らず  
 浅くのみ春は霞みて  
 麥の色はつかに青し  
 旅人の群はいくつか  
 畠中の道を急ぎぬ

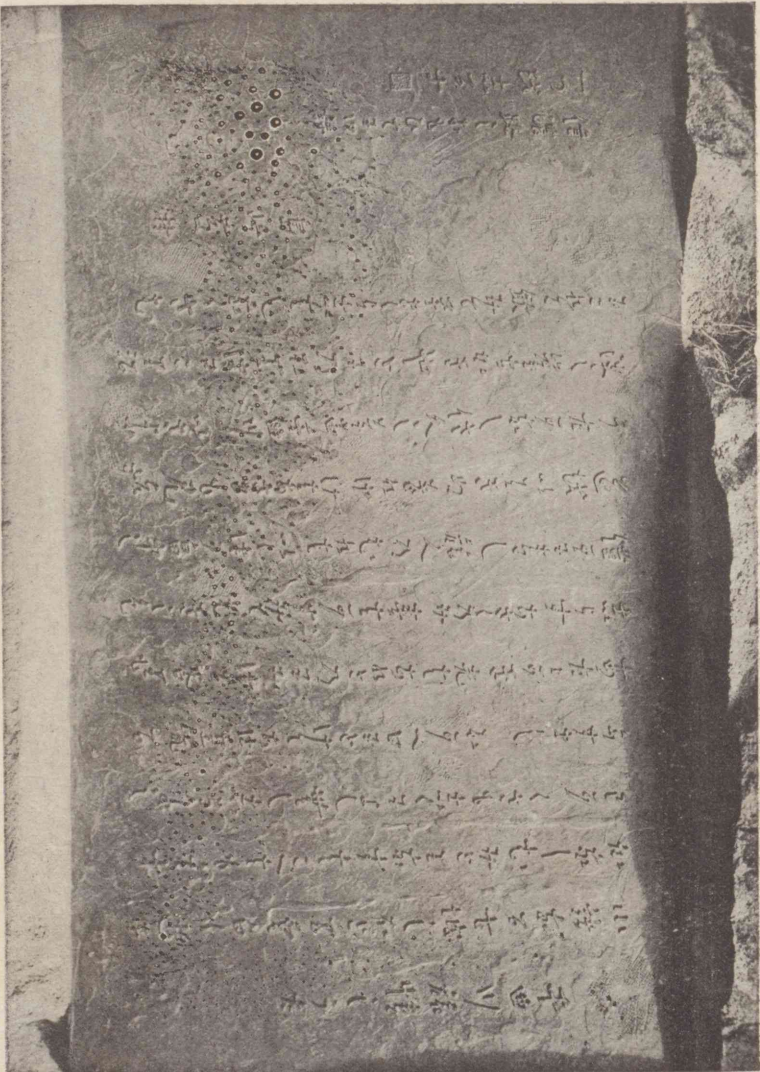
暮れ行けば浅間も見えず

佐久

長野縣北佐久及び  
 南佐久兩郡の總  
 稱。

千曲川  
 信濃川の上流。

歌哀し佐久の草笛  
 千曲川いさよふ波の  
 岸近き宿にのぼりつ  
 濁り酒濁れる飲みて



(歌の情景川曲千)

碑 詩 村 藤

草枕しばし慰む

二 椰子の實

名も知らぬ遠き島より  
流れ寄る椰子の實一つ

故郷の岸を離れて  
汝はそも波に幾月

舊の樹は生ひや茂れる  
枝はなほ影をやなせる

われもまた渚を枕  
孤身の浮寝の旅ぞ

實をとりて胸にあつれば  
新たなり流離の憂

海の日の沈むを見れば  
激り落つ異郷の涙

思ひやる八重の汐汐  
いづれの日にか國に歸らむ

(藤村詩集)

一八 朗 詠

春 夜

燭ニ背イテ共ニ憐ム深夜ノ月花ヲ踏ンデ同ジク惜シム  
少年ノ春。

白居易

白居易  
號は樂天。支那唐  
代の詩人(西紀七五  
一八七)。  
凡河内躬恆  
平安朝時代の歌  
人。古今集の撰者。

凡河内躬恆

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかく  
るる。

郭 公

一聲ノ山鳥曙雲ノ外萬點ノ水螢ハ秋草ノ中。

許 渾

許渾  
支那唐代の詩人。  
明日香王子  
桓武天皇の皇子。  
承和二年(四九五)  
薨。

明日香王子

さつきやみおぼつかなきを時鳥なくなる聲のいとどは  
るけき。

秋 興

白 居 易

林間ニ酒ヲ煖メテ紅葉ヲ焼キ、石上詩ニ題シテ綠苔ヲ拂  
フ。

藤 原 義 孝

秋はなほ夕まぐれこそただならねをぎの上風はぎのし  
た露。

雪

白 居 易

雪ハ鷺毛ニ似テ飛ンデ散亂シ、人ハ鶴髦ヲ被テ立ツテ俳  
徊ス。

藤原義孝  
歌人。天延二年（  
空西）歿、年九十六。

紀友則

古今集の撰者。延  
喜五年歿、年六十  
一。

雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて  
折らまし。

紀 友 則

祝

慶 滋 保 胤

長生殿裏春秋富ミ、不老門前日月遅シ。

讀 人 知 ら ず

わが君は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむ  
すまで

慶滋保胤  
文人。長徳三年（  
空毛）歿。

一九羽衣

謡曲

シ	テ	天人
ワ	キ	漁夫白龍
ワ	キツレ	同行の漁夫
場	所	駿河
季	節	春

風早の云々  
 風早の三穂の浦曲  
 を漕ぐ舟の船人騒  
 ぐ浪立つらしも  
 (萬葉集)

萬里の好山云々  
 萬里好山雲乍歛  
 一樓明月雨初晴  
 (詩人玉屑)  
 忘れめや云々  
 忘れずよ清見が關  
 の波間より霞みて  
 見えし三保の浦  
 松  
 (中務卿親王、續古今集)

ワキツレ一聲風早の、三保の浦曲を漕ぐ舟の、浦人騒ぐ浪路かな。ワキサシ謡「これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。  
 ワキツレ謡萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨初めて晴れたり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、浪たち續く朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身の眺にも、心空なる景色かな。  
 下歌忘れめや、山路をわけて清見瀉、遙かに三保の松原に、たちつれい

風むかふ云々  
 風むかふ雲の浮浪  
 立つと見て釣せぬ  
 さきに歸る船人  
 (冷泉爲相、瀧浦八景、遠浦歸帆の歌)

ざや通はん。上歌風むかふ、雲のうき浪たつと見て、釣せで人や歸らん。待てしばし、春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人多き小舟かな。釣人多き小舟かな。ワキ詞われ三保の松原に、あがり、浦の景色をながむるところに、虚空に花ふり、音楽聞え、靈香四方に薫ず。これたゞごとと思はぬところに、これなる松に、美しき衣かゝれり。寄りて見れば、色香妙にして、常の衣にあらず。いかさまとりて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。ワキ詞これは拾ひたる衣にて候ほどに、とりて歸り候よ。シテ詞それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物に非ず。元の如くにおき給へ。ワキ詞そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を

返すことあるまじ。シテ詞悲しやな、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に還らんこともかなふまじ。さりとは返したび給へ。  
 ワキ謡この御詞を聞くよりも、いよく白龍力をえ、ワキ詞もとよりこの身は心なき、天の羽衣取隠し、ワキ謡かなふまじとて立ちのけば、シテ謡今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ謡地にまた住めば下界なり。シテ謡とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ謡白龍衣を返さねば、シテ謡力及ばず、ワキ謡せんかたも、地謡涙の露の玉鬘、かざしの花もしをくと、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

シテ謡天の原ふりさけみれば霞立つ、雲路まどひてゆくへ知らずも。地謡住みなれし、空にいつしかゆく雲の、羨しき景色かな。迦陵頻伽のなれくし、聲今更にわづかなる、雁がねの歸りゆく天路をさけば、懐かしや。千鳥鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹く

天の原云々  
 「天の原ふりさけ見れば霞立ち家路まどひてゆくへ知らずも」  
 (丹後風土記)

まで懐かしや。

ワキ詞いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候ほどに、衣を返し申さうざるにて候。シテ詞あらうれしや。こなたへ賜

羽衣  
 世阿彌元清作  
 天の原ふりさけみれば霞立つ雲路まどひてゆくへ知らずも  
 地謡住みなれし空にいつしかゆく雲の羨しき景色かな  
 迦陵頻伽のなれくし聲今更にわづかなる雁がねの歸りゆく天路をさけば懐かしや  
 千鳥鷗の沖つ浪行くか歸るか春風の空に吹く

衣 羽

り候へ。ワキ詞しばらく。承り及びたる天人の舞樂、たゞ今こゝにて奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ謡うれしや、さては天上に還らんことを得たり。このよろこびにとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。たゞ今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくてはかなふまじ。さりとはまづ返し給へ。ワキ詞いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに、天にやあがり給ふべき。シテ詞いや、疑ひは人間にあり。天に偽なきものを。ワキ詞あらはづかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ謡少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ詞天の羽衣風に和し、シテ謡雨に濕ふ花の袖、ワキ詞一曲をかなで、シテ謡舞ふとかや。地謡東遊びの駿河舞、この時や始なるらん。クリ地謡それ久かたの天といつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、久かたの空とは名づけたり。

春霞云々

「春霞たなびきにけり久かたの月の桂も花や咲くらん」  
(紀貫之、後撰集)

天つ風云々

「天つ風雲の通ひ路吹きとちよ乙女の姿しばしとゞめん」  
(良岑宗貞、古今集)

君が代は云々

「君が代は天の羽衣稀に來てなづともつきぬ巖なるらん」  
(讚人知らず、拾遺集)

孤雲の外云々

「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前」  
(大江定基)

シテ、サシ謡しかるに月宮殿の有様、玉斧の修理とこしなへにして、地謡「白衣、黒衣の天人の、數を三五にわかつて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ謡我も數ある天少女、地謡月の桂の身をわけて、かりに東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。クセ春霞たなびきにけり久かたの月の桂も花や咲く。げに花かづら色めくは、春のしるしかや。面白や天ならで、こゝも妙なり天つ風雲の通ひ路吹きとちよ。少女の姿しばしとゞまりて、この松原の春の色を三保が崎、月清見瀉、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ浪も松風も、のどかなる浦の有様。その上、天地は何を隔てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ謡君が代は、天の羽衣稀にきて、地謡「撫つとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへて數々の、笙笛、琴、篋、孤雲の外に充ち満ちて、落日の紅は蘇命路の山をうつして、緑は浪に浮島がはらふ嵐に花ふりて、げに雪を廻らす白雲の袖ぞ



妙なる。シテ謠南無歸命月天子、本地大勢至。地謠東遊びの舞の曲、シテ、ワキ謠あるひは天つみ空の緑の衣、地または春立つ霞の衣、シテ「色香も妙なり少女の裳裾、地謠左右左、さいう颯々の花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖。キリ地謠東遊びの數々に、その名も月の宮人は、三五夜中の空にまた、満願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さるほどに時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の、愛鷹山あしたかやまや富士の高嶺かすかになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。

(觀世流謠曲)

高山樗牛

名は林次郎。文學博士。山形縣の人。明治三十五年歿。年三十二。

二〇 世界の四聖

高山樗牛

一

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば、誰かこれを能くせんや。釋迦孔子ソクラテースキリストの四人、世呼んで世界の四聖とたゞふるは宜なるかな。釋迦は西曆紀元前凡そ五百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生まる。父は淨飯王、母は麻耶夫人、その本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦身は一國の太子に生まれけれども、夙に思ひを人生の問題に潜め、二十九の歳、その妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隠れて、道を修むること六年、遂に人生の奥義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳

にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど、徒らに思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流



出山釋迦圖  
(符野芳崖筆)

派を樹てて相争ふところは、畢竟名目の優劣のみ。未だ一

世の元々をして、歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をしてその歸依するところを知らしめたり。

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年

の昔、支那の魯國に生まる。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績



孔子

大いに舉り、内外その風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高弟を率ゐて、四方の遊説を試みぬ。

當時の支那はいはゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にしてその君を弑する者あり、或は子にしてその親を害する者あり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風

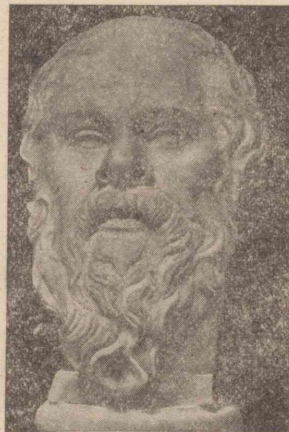
俗の頹廢未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子すでに志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じていはく、「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知るものなきか。」と。門弟子貢慰めていはく、「何ぞ夫子を知るものなからんや。」孔子答へていはく、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と。後幾ばくもなくして歿す。時に七十三。

ソクラテースはギリシヤのアゼンス府に住める一彫刻師の子なり。その生まれたるはおよそ紀元前四百七十年の頃にして、釋

迦孔子と年をへだつること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。ギリシヤの當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に止まり、道徳は空文の上のみ貴ばれたり。その状なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して、殆ど裨益するところなかりき。ソクラテースは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず。侃諤の正義その稀代の雄辯と相伴なひて一世を風靡せり。

然るに、「喬木は風に折らる。」といふ喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの、相計りて國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀にいはく、「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を翹め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて

死刑に處すべし。」と。ソクラテースがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテースを以て傲慢不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテ



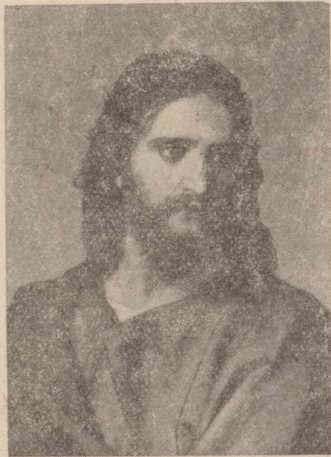
ソクラテース

ース泰然として驚かず、いはく、「命のみ。」と。

ソクラテースの獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死靈魂未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、輒ち答へていはく、「予はただ正義に導かれんのみ。死又何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子、遺言を求む。ソクラテースいはく、「爾一

アスクレピアスの神。ギリシヤの醫藥の神。

鶏を以てアスクレピアスの神に捧げよ。」と。蓋し、嘗て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲ならん。ギリシヤの聖人ソクラテースはかくの如くにして逝きぬ。年七十。



キリスト

キリストとは、「膏灌がれたる者」といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。ユダヤのベツレヘムに生まる。西曆紀元第一年はその生後四年目に當れり。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、ユダヤの各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。

抑、當時はローマ帝國の榮華、正にその極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日なし。殊にキリストの故國なるユダヤは、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇なる淫祠を崇拜して、益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。こゝに於て、一世の人心は悉く偉人の現出して、この暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。キリストこの間に生まれ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳するや、遠近靡然としてこれに赴く。僧侶、學者、官吏等はこれを喜ばず、以て猥に新法異説を唱へて、民を迷はすものなりとなし、キリストを捕へて磔殺の刑に處す。キリスト豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りていはく、「神よ、彼等を宥せ。彼等はその爲すべきところを知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路

傍に哀哭する女子を顧みていはく、「エルサレムの女子よ、吾が爲に哭くこと勿れ。たゞ己と己の子との爲に哭け。」と、かくの如くしてキリストは三十三年の短命を以て十字架上の露と消え去りぬ。キリストの死後、その弟子は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。キリスト教即ちこれなり。

## 二

以上は四聖の略傳なり。その人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべきところなり。四聖の中、釋迦を除きては、いづれも軼軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテースとキリストとはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔せられたり。慘澹たりと謂ふべし。然れどもこれ等の人々の志すところは天下後世に在り、現世の禍

福と一身の安危とは、毫もその顧慮するところにあらず。故にその死に就くや、晏如としてなほ歸するが如し。孔子はその一身の不幸を憂へずして、却つて「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えん。」と、嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に、その妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言していはく、「正義を信ずるものにとりて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、その一日即ち國民の迷をさまさざるべからず。」と。キリストは己を罪に陥るゝものの爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖はその生まれたる所と時とを異にす。故にその教理にも亦多少の差違なきを得ず。今その要略を擧ぐれば左の如し。釋迦の教理は煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始りて苦に終る。生老病死いづれか苦に非ざるべき。

故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾に在り、情慾の原因は、「我」の一念に執着するに在り。故に吾人は、「我」の一念を脱却して、無我無心の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平かにするに在り。而して身を修むる基は孝に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生まれながらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて、これを完うすること能はざるもの多し。教育の要、こゝに於てかあり。すでに教育を受けて、身すでに修まらば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治まるべく、國治まらば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は、一身の修養に始り、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテースの教はいはゆる知徳合一説なり。思へらく、眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、ともに知識道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となさば、正義おのづからその中に在り。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴の爲に存せず。然れども、富貴は道德の中に在り。」と。

キリストの教は愛の教なりと稱せらる。いはゆる山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。いはく、心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。

憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、その人は神を見ることを得べければなり。惡に敵することなかれ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をもめぐらしてこれに向けよ。汝の隣人を慈みて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義をその前に行ふこと勿れ。右の手の爲すところを左の手に知らしむること勿れ。偽善者の行に倣ふこと勿れ。隠れたるを鑑み給ふ神は、顯に報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に到る門は、其の路大きく、これに入るものは多し。嗚呼、いかに生命に到る門は窄く、その路は細く、これをうるもの少きぞや。凡そこの訓を聽きて

行ふものは、磐の上に家建てたる智者の如く、聴けども行はざるものは、沙上に屋を架せる愚人の如し。」と。キリスト教の精髓は、後世の人いかなる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。

かくの如きは四聖の傳記及び教義の概要なり。嗚呼、四聖逝いてすでに幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凜々として生氣あるを見よ、世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠の救済者なりと謂ふべし。その遺徳の高大なること何を以てかこれに比せんや。

(樽牛全集)

## 二一 生活の中心

阿部次郎

自分はすべての人に勧めるに、その生活の中心をこしらへることを以てしたい。その中心を中心として、日々の生活を調整することを以てしたい。もしその中心を発見することが容易でないならば、自分は生活の中心を求めることを以て、それまでの生活の中心とすることを勧めたい。

諸君が學校にゐる間は、學校の課程が外部的ながら、諸君の生活に一種の中心を與へてゐる。諸君は諸君の生活を調整すべき具體的秩序を手近に持つてゐる。

従つて、たとひ學校をつまらないものと見る人々と雖も、なほこれによつて、自分の生活に一種の具體的内容を與へられてゐることは、争ふことができないであらう。しかし、諸君が學校を卒業し

阿部次郎  
東北帝國大學教  
授。哲學者。山形  
縣の人。明治十六  
年生。



て授業時間や、課題や、練習や、試験の束縛を脱れる時、諸君はまた一方に、何となく日々の生活に具體的内容を缺いて、退屈と空虚を覺えることを禁じ得ないであらう。學校に代つて諸君の生活の中心となるものが、直ちには諸君の手に落ちて來ないであらう。多くの人は學校を卒業すると共に、何かをしなければならぬ義務を他人から負はされるか、もしくは自らの感情の中に負ふを常とする。しかし、今日の社會は、我等の卒業をまち受けてゐて、直ちに、我等に適當な活動の地を與へるやうな社會ではない。さうして、自ら活動の地を造り出さうとするにも、我等は自己の内面に確かさの自信を缺き、我等の働きかけるべき社會に對する適當な知識を缺いてゐるが故に、内外兩様の意味に於て、どこから手をつけていかがわからなくなる。かくて焦燥と、空虚と、この二つの相反したやうで相近似した感情は、手を携へて我等の生活に迫つて來る。

さうして我等はあせればあせるほど、益、生活の中心を失つた感じに捉はれなければならぬ。自分は學校を卒業すると、直ちにこの病に捉はれて、學校卒業後の二三年は、まるで何事も手につかなかつた。さうして、この状態を脱却するまでには、自分としては堪へ難いほどの忍耐と節制とを積まなければならなかつた。故に自分は、卒業の諸君を送るに當つても、特にこの點に關する注意を乞はなければならぬ。

凡そ人生は短く、人生は長い。爲すべきことを持つてゐるものには、六七十年の歲月は須臾にして流れ去るであらう。しかし、何事にも倦んだ心に取つては、五十年の壽命も、長い退屈な旅と思はれるに違ひないのである。さうしてこの短い生涯を空過しないためにも、この長い一生を退屈せず暮すためにも、我等には生活の中心が必要である。自分は中心を缺いた生活の中にある充實

と幸福とを考へることができない。  
 そこで我等の問題は更に一步を進めて、いかにして生活の中心を發見すべきかといふことに移る。この問題に對する解答もまた固より容易ではないが、自分には、その具體的方法として一つの考案がある。

といつても、それは何も珍しいことではない。最も自分に適しさうな人を選んで、その人の内面的發展を精細に跡付け、その通つた道を自分も内面的に通つて見ることである。約言すれば、自らその「師」を擇んで、自己の鍛鍊をその「師」に託することである。師の奴隸とならずに、しかも「師」を信賴して、常に「師」に照らして、自己を發見する途を進むことである。

自分は自分たちの受けて來た纏りのない教育と、徒らに漠然として廣い知識とを思ふ毎に、古人の受けた鍛鍊と訓育とを羨しい

飯山

信濃國(長野縣)下水内郡飯山町。

白隠和尚

黄檗宗の高僧。駿河國(静岡縣)の人。明和五年(西〇二)歿、年八十四。

高社

信濃國(長野縣)下高井郡、飯山町の南。

千曲川

長野縣の北部を貫き、下流は新潟縣に入りて、信濃川となる。

と思ふ。自分はこの春、信濃の飯山に行つて、白隠和尚修業の地なる正受庵を訪うた。庵は高社たかやしろの山を望み、千曲川を望む小丘の上にあつて、杉の老樹の生ひ繁つた幽邃な境にある。初め白隠が惠端和尚をこの庵に訪うた時、惠端は白隠を崖から蹴落したさうだ。白隠はそれにも懲りずに、惠端に師事したさうだ。さうして、或日白隠が一つの悟りを得て、その坐禪の座から(彼は戶外の石上に坐して工夫を積んだといふことである)歸つて來る時に、惠端は縁の端に出て、遠くから手招きをしながら、白隠を歓迎したさうだ。

自分はその話を聞いて白隠と惠端との間が羨しくてならなかつた。自分にも、自分を崖から蹴落してくれる師匠、縁側から自分を手招きしてくれる師匠があつたら、どんなに幸福なことであらう。師弟とは、與へられるだけ與へ、受けられるだけ受けんとする、二個の獨立せる、しかも相互に深く信賴せる靈魂の關係である。弟子

をその個性のまゝに一人の「人」とするところに、師の師たる所以があり、その稟性に随つて、一個の獨立せる人格となるところに、弟子の最も多くその師に負ふ所以がある。「道」の傳統は、何等かの意味に於ける師弟の關係を経て、始めて内面的に生きるのである。

固より師に就くとは、自分の生活内容を、その師の供給に仰ぐといふことではない。我等が愛し、憎み、努め、怒る心は、我等が我等自身の中に豫め持つてゐなければならぬところである。これ等の愛憎や、喜悲は、我等の生活を刻々に新たな境涯に漂はしめ、往々にして、我等の生涯を困惑と、壅塞と、彷徨と、昏迷との境に導く。この窮境を拓き、この關門を透過する努力に於て、我等は始めて「師」の忠言を必要とするに至るのである。我等が師に就いて學ぶべきところは、問題の解き方である。途の切り拓き方である。生活内容を流れ行かしむべき方向である。もし我等自身の中に、豫め生活

内容を有することなく、一定の傾向を有することなく、解決を要する問題を有することがないならば、師に就くことは、全然無意味でなければならぬ。故に生活の中心を求め、古人の著作を研究するといふ時、我等の研究の意味は、讀書にあるのではなく、我等の内面的知覺を開拓して、これを正しい方向に導いて行くところにあることは、繰り返すまでもないことである。書を讀むとは、自ら生きることが停止することを意味するならば、また他人の著作を研究するとは、自ら省みる事を中斷することを意味するならば、我等は固よりいかなる場合にも、書を讀むことを、他人の思想を研究することを、生活の中心とすべきではない。こゝに讀書といひ、研究といひ、師に就くといふのは、自ら生き、自ら省みる爲の一つの途を意味するものであることは、明瞭に記憶して置く必要がある。我等が師に就いて學ぶことを要する第一義諦は、行住坐

臥に師の言葉を讀誦することではなくて、何よりまづ師と同一の勇氣を以て、人生に衝き當ることではなければならぬ。自己の直接経験を基礎として人生の疑ひに觸れ、人生の疑ひを解く途を求めることではなければならぬ。

自分は今、最も自分に適しさうな人を選んで、これを師とすべきことをいつた。しかし、こゝに「最も自分に適する。」といふのは、現在の自分が最も愛好するもの、現在の自分が最も親しみ易いもの——換言すれば、現在の自分の程度を以ても容易に接近し得べきものといふ意味ではないのである。此の如き「師」は、たゞ我等をあまやかすもの、現在に於ける我等の偏局した發展を、更に一面的に偏局せしめるものに過ぎないであらう。現在の自分は、自分の本質の一切ではない。我等の本質の中には無限の可能性がある。他日、我等の本質の中から、現在の自分には、思ひも寄らぬ花が咲き

出る日がないことを、誰か保證することができよう。我等の「師」は、我等の本質の中から、これ等の數多き可能性を引出す力があるものでなければならぬ。我等を鞭撻して、常により高い階段を望ましめる力を持つてゐるものでなければならぬ。約言すれば、我等を叱り、我等を引上げ、我等を打碎き、我等を改造するに足るほど、複雑で偉大なものでなければならぬ。この意味に於て、我等に「無理」を強ひる力のないものは、我等の師と仰ぐに値せぬものである。

(三太郎の日記)

自修文

二手 巾

芥川龍之介

芥川龍之介  
小説家。東京市の人。昭和二年歿、年三十六。  
ヴエランダ  
庭などに向つた縁側。



ストリンドベルグ  
スウェーデンの戯曲家 (西紀一八四一—一九一三)。  
岐阜提灯

東京帝國大學教授長谷川先生は、ヴエランダの籐椅子に腰をかけてストリンドベルグの作劇術を讀んでゐた。

先生は警拔な一章を讀み終る毎に、黄色い布表紙の本を膝の上に置いて、ヴエランダに吊してある岐阜提灯の方を漫然と一瞥する。先生は本を下に置く度に、岐阜提灯によつて代表される日本の文明を思つた。先生の信ずる處によると、日本の文明は、最近五十年間に物質的方面ではかなり顯著な進歩を示してゐる。が、精神的には殆ど之といふ程の進歩も認める事が出来ない。否、寧ろ或意味では墮落してゐる。では現代に於ける思想家の急務として、

此の墮落を救済する途を講ずるにはどうしたらいいであらうか。先生は之を日本固有の武士道による外は無いと論斷した。武士道なるものは、決して偏狭なる島國民の道德を以て目せらるべきものではない。却つてその中には、歐米各國の基督教的精神と一致すべきものさへある。この武士道によつて、現代日本の思潮に歸趣を知らしめる事が出来るならば、それは獨り日本の精神的文明に貢獻する處があるばかりではない。延いては、歐米各國民と日本國民との相互の理解を容易にするといふ利益がある。或は國際間の平和も、これから促進されるといふ事があるであらう。先生は日頃から、この意味に於て、東西兩洋の間に横たはる橋梁にならうと思つてゐる。

所が先生は、その熱心な書見を中途でやめなければならなくなつた。なぜといへば突然、訪客を告げる小間使が、先生の清興を妨

げてしまつたからである。

先生は本を置いて、今し方小間使が持つて来た小さな名刺を一瞥した。名刺には小さく「西山篤子」と書いてある。どうも今まで會つた事のある人ではないらしい。交際の廣い先生は、籐椅子を離れながら、それでも念の爲に、一通り頭の中の人名簿を繰つて見た。が、やはりそれらしい顔も、記憶も浮かんで來ない。そこで、棗代りに名刺を本の間へはさんで、それを籐椅子の上に置いた。

やがて時刻を計つて、先生は應接室の扉を開けた。中へ這入ると、椅子に掛けて居た四十恰好の婦人の起ち上つたのが、殆ど同時である。客は先生の判別を超越した上品な鐵御納戸の單衣を着て、それを黒の絹の羽織が胸だけ細く餘した處に、帶止の翡翠を涼しい菱の形に浮き上らせてゐる。髪が丸髻に結つてある事は、かういふ些事に無頓着な先生にもすぐわかつた。日本人に特

有な、丸顔の琥珀色の皮膚をした、賢母らしい婦人である。先生は一見して、この客の顔をどこかで見たことがあるやうに思つた。

「私が長谷川です。」

先生は愛想よく會釋した。かういへば、會つた事があるなら向ふでいひ出すだらうと思つたからである。

「私は西山憲一郎の母でございます。」

婦人ははつきりした聲でかう名乗つて、それから丁寧に會釋した。西山憲一郎といへば、先生は覺えてゐる。よく思想問題を提げては先生の許に出入した。それが此の春腹膜炎に罹つて大學病院へ入院したので、先生も序ながら一二度見舞に行つてやつた事がある。此の婦人の顔を、どこかで見た事があるやうに思つたのも偶然ではない。あの眉の濃い、元氣のいゝ青年と、此の婦人とは、日本の俗諺が「瓜二つ」と形容するやうに、驚く程よく似てゐるので

ある。

「はあ、西山君の……さうですか。」

先生は獨り頷きながら、小さなテーブルの向ふにある椅子を指さした。

「どうか、あれへ。」

婦人は一應突然の訪問を謝してから、又丁寧に禮をして、示された椅子に腰をかけた。その拍子に、袂から白いものを出したのは手巾であらう。先生はそれを見ると、早速テーブルの朝鮮團扇を勧めながら、その向側の椅子に座をしめた。

「結構な御すまひでございます。」

婦人は稍、わざとらしく室の中を見廻した。

「いや、廣いはかりで一向かまいません。」

かういふ挨拶に慣れた先生は、折から小間使の持つて來た冷し茶



朝鮮團扇

を客の前に直させながら、直ちに話題を相手の方へ轉換した。

西山君は如何です。別段御容體に變りはありませんか。」

「はい。」

婦人はつゝ、ましく兩手を膝の上に重ねながら、ちよつと語を切つて、それから靜かにかう云つた。やはり落着いた滑らかな調子で云つたのである。

「實は今日も悴の事であがつたのでございますが、あれはたうとういけませんでございました。在學中は色々先生に御厄介になりまして……」

「病院に居りました間も、よくあれがお噂を致したものでございますから、お忙しからうとは存じましたが、お知らせかたぐいお禮を申し上げようと思ひまして……」

いや、どうしまして。」

先生は茶碗を下へ置いて、その代りに青い蠟を引いた團扇を取上げながら、憮然としてかう云つた。

「たうとういけませんでしたかなあ。丁度これからといふ年だつたのですが……私は又、病院の方へも御無沙汰してゐたものですから、もう大抵よくなされた事だとばかり思つてゐました。——すると何時いつになりますかな、なくなられたのは。」

「昨日が丁度初七日でございます。」

「やはり病院の方で、……」

「さやうでございます。」

「いや、實際意外でした。」

「何しろ、手の盡くせるだけは盡くした上なのでございますから、諦めるより外はございませんが、それでもあれまでに致して見ますと、何かにつけて愚痴が出ていけませんのでございます。」

こんな對話をしてゐる間に、先生は意外な事實に氣がついた。それは、此の婦人の態度なり舉措なりが、少しも自分の息子の死を語つてゐるらしくないといふ事である。眼には涙もたまつてゐない。聲も平生の通りである。その上、口角には微笑さへ浮かんでゐる。これで話を聞かずに外貌だけ見てゐるとしたら、誰でも此の婦人は日常茶飯事を語つてゐるとしか思はれなかつたに相違ない。——先生にはこれが不思議であつた。

昔先生が伯林に留學してゐた時分の事である。ウイルヘルム第一世が崩御された。先生は此の訃音を行きつけの珈琲店で耳にしたが、固より一通りの感銘しか受けなかつた。そこで何時ものやうに元氣のいゝ顔をして、杖を脇に挟みながら、下宿へ歸つて來ると、下宿の子供が二人、扉を開けるや否や、兩方から先生の頸に抱きついて、一度にわつと泣き出した。一人は茶色のジャケットを着

ウイルヘルム第一世  
フレデリック大王  
ともいふ。獨逸皇  
帝(西紀一七七一—一八  
〇〇)。



た十二になる女の子で、一人は紺の短いズボンを穿いた九つになる男の子である。子煩悩な先生は、譯がわからないので、二人の明るい色をした髪の毛を撫でながら、頻りに「どうした、どうした。」といつて慰めたが、子供は中々泣きやまない。さうして、しゃくり上げながら、こんな事をいふ。

「おちいさまの陛下が、おなくなりになつたのですつて。」

先生は、一國の元首の死が、子供にまでこれ程悲しまれるのを不思議に思つた。獨り皇室と人民との關係といふやうな問題を考へさせられたばかりではない。西洋へ來て以來、何度も先生の視聽を動かした西洋人の衝動的な感情の表白が、今更のやうに、日本人たり、武士道の信者たる先生を驚かしたのである。其の時の怪訝と同情とを一緒にしたやうな心持は、今に忘れようとしても忘れる事が出来ない。——先生は今も丁度其の位の程度で、逆にこの

婦人の泣かないのを不思議に思つてゐるのである。

が、第一の發見の後には、間もなく第二の發見があつた。丁度主客の話題がなくなつた青年の追懷から、その日常生活の細目に及んで、更に又もとの追懷へ戻らうとしてゐた時である。何かの拍子で、朝鮮團扇が先生の手をすべつて、ぱたりと床の上に落ちた。會話は無論寸刻の中斷を許さない程切迫してゐる譯ではない。そこで先生は半身を椅子から前へのり出しながら、下を向いて床の方へ手を伸ばした。團扇は小さなテーブルの下に——上草履に隠れた婦人の白足袋の側に、落ちてゐる。その時、先生の眼には、偶然婦人の膝が見えた。膝の上には手巾を持つた手がのつてゐる。勿論これだけでは發見でも何でも無い。が同時に、先生は婦人の手がはげしくふるへてゐるのに氣がついた。ふるへながら、それが感情の激動を強ひて抑へようとするせるか、膝の上の手巾

を、両手で裂かないばかりに緊く握つてゐるのに気がついた。さうして最後に、皺くちやになつた絹の手巾が、しなやかな指の間に、さながら微風にでも吹かれてゐるやうに、繡ぬいどりのある縁を動かしてゐるのに気がついた。――婦人は顔でこそ笑つてゐたが、實はさつきから全身で泣いてゐたのである。

團扇を拾つて顔を上げた時に、先生の顔には今までにない表情があつた。見てはならないものを見たといふ敬虔な表情があつた。

「いや、御心痛は私の様な子供の無い者にもよくわかります。」

先生は眩しいものでも見るやうに稍、大仰に頸を反らせながら、低い感情の籠つた聲でかう言つた。

「有難うございます。今更何と申しても、かへらない事でございますから……。」

婦人は心持ち頭を下げた。晴々した顔には、依然として豊かな微笑が湛へてゐる。――

それから二時間の後である。先生は湯に入つて晚餐を済ませて、食後の果物をつまんで、それから又、樂々とヴェランダの籐椅子に腰を下した。

長い夏の夕暮は、何時迄も薄明りを漂はせて、硝子戸を開けはなした広いヴェランダは、まだ容易に暮れさうなけはひも無い。先生は其の微かな光の中で、さつきから左の膝を右の膝の上に載せて、頭を籐椅子の背にもたせながら、ぼんやり岐阜提灯の赤い房を眺めて居る。先生の頭の中は、西山篤子夫人の健氣な振舞で未だに一杯になつてゐた。

穂積重遠  
 法學博士、東京帝  
 國大學教授、東京  
 市の人。明治十六  
 年生。

二三 内助の力

穂積重遠

婦人の努むべきことは何であるか。一口にいへば、それは内助である。家庭においてはその内部を整頓するのが婦人の務であり、國家においてもその内容を充實させるのが婦人の働である。これは婦人に最も適した、而して婦人でなければできぬ仕事である。婦人が各種の職業に就き、今まで男子の職業になつてゐた仕事に段々婦人に開放されることは結構であるが、一般の婦人の天分たる仕事としては、この内助を措いて外にないと考へる。

それについて思ひ起すのは、先頃亡くなられた土肥慶藏先生のことである。先生はたゞ醫學博士として偉かつたばかりでなく、人格はもとより文學方面の見識においても實に立派な方であつたが、還曆の御祝のときに、先生の徳を慕つてゐる人達が先生の壽

像を作つて、それを博士邸の庭に建てた。その除幕式に私も參列したが、その胸像の下に先生と奥様が並んで立つて居られる、その前へ發起人總代を初として參列の名士が交るゝ出て祝辭を述べ、土肥先生の功績を稱へる演説をされた。私はそれを聽いて、今更ながら偉い先生だと感じたのであるが、演説者が皆先生のみを賞め稱へて、目の前に並んで立つて居られる奥様のことを少しもいはない。この次の人がいふだらうと思つてゐても誰もいはない。私は何となく物足らぬ氣持がしてゐた。ところが最後に立つたのが當時の駐日ドイツ大使ゾルフ博士であつた。博士は非常な雄辯家である。ドイツ語演説であつたが、實に立派な祝辭であつた。ゾルフ博士は、他の人々と同じく先づ土肥博士の業績を十分に賞揚したが、更に言葉を改めて、土肥博士が斯く學徳共に大成されたのは、博士の人格と努力とによること勿論だが、しかしそ

れは博士一人の力ではない、博士夫人の内助によつてである、我輩はこゝに博士夫人に絶大の敬意を表する、斯う述べたのである。私はその一言を聽いて、先刻から胸にたまつてゐた溜飲が一度に下つたやうな氣持がした。殊に私が面白く思つたのは、ドイツ語演説中にゾルフ博士が特に「ナイジヨ」と日本語を挿んだことである。多分この内助といふ言葉にちやんと當る外國語がないのであらう。勿論西洋婦人も内助をする。しかし内助は日本婦人の特長たる美德である。土肥博士夫人がその好典型であるのを、却つて日本人が氣がつかず、外國人たるゾルフ大使に指摘されたのである。

誠に内助は日本婦人の特長である。私はこの特長が益發揮されんことを切望する。而して私がそれをいふのは、必ずしも今まで世間でいはれたのと同じ意味ではない。もつと強い意味である。普通一般の考へ方では、婦人自身も内助といふことを單に家庭内の手傳ひ仕事に過ぎぬやうに思ひ、その眞價値を十分に自覺自重してゐない。而して男子は又婦人の内助につき十分な感謝と尊敬とを拂つてゐない。私はそれを豫々遺憾に思つてゐた。然るにゾルフ大使が、内助が婦人の本分であり、成功が夫妻協力の結果なることを明言したのであつて、私がそれを聽いて溜飲が下つたのは、その日その席の溜飲が下つただけではないのである。

内助は確かに家庭の仕事である。しかしながら同時に、國家の仕事であり、社會の仕事なのである。我々男子は從來偉さうに國家社會の事を男だけの力でやつてゐるやうに思つてゐたが、それは大變な間違で、國家社會は男と女とで組立ててゐるのである。男女で片棒づつかついでゐるのであつて、男だけで背負つてゐる國家でもなければ、女だけで背負つてゐる社會でもない。それ故

婦人が更に一層自覺して、内助なることが頗る大切な仕事であるといふことを考へねばならぬと同時に、又男子は婦人の内助が如何に有力であるかを考へ、婦人内助の力によつて我々はこの日本を背負つて立つことができるのであることを、十分に認識し、尊敬し、且感謝せねばならぬと思ふ。

然らば今日日本婦人のなすべき内助の仕事は何か。先づ以て家庭の美化・浄化である。今日の世の中は實に殺風景である。毎日の新聞を見ても、いやな事ばかり目につく。家庭にも種々の悲劇があり、社會には忌はしい事件が續出する。何とかして世の中をこの殺風景から救ひ、この醜い世の中を本當の人の世らしい美しい世の中にしたいたいと思ふ。而して人生美化・浄化の一番の適任者は婦人である。今日のこの殺風景を救ふものは、日本婦人が古來もち傳へたる優雅の婦徳より外ないのである。

日本は元來極めて優美な國だつた筈である。然るにだん／＼進歩發展するにつれて、人間の心の美しさが次第に喪はれて行くやうに思はれるのは、誠に遺憾な次第である。人或はこれを物質文明の弊といふ。私はさういひたくない。精神文明が物質文明に伴なはぬ弊といひたい。人間がこゝまで進んで來たのは物質文明のお蔭である。この驚歎すべき物質文明を逆戻りさすべきではない。益、進展せしむべきである。物質文明も亦人間の驚くべき精神力の發現である。その精神力を更に一層精神文明の方に働かせ、精神文明が物質文明に並行するのみならず、それをリードするやうにありたいと思ふ。必ずしも物質文明が男の仕事で、精神文明が女の仕事だとはいはない。しかし精神文明の振興は婦人に最も適する仕事であるから、婦人は主としてこの方面に力を注がれたい。即ち私が特に日本婦人に期待するのは、婦人の美

徳による國家社會の淨化・美化である。而して家庭が集つて國家社會を成すのであるから、國家社會を淨化し美化せんには、先づ家庭を淨化し美化せねばならぬ。

我が國の家庭は昔から美しいものであつた。萬葉集に

憶良らは今はまからむ子泣くらむ

そのかの母も吾を待つらむぞ

といふ山上憶良の歌がある。私の妻と直接にいはずに子供のお母さんと呼んだ所に、我が國の家庭の親しみがあらはれてゐる。日本の家庭では、夫が外で一日働き、吾を待つらむぞ」と急いで歸つて來ると、家事にいそしんでゐた妻がきげんのよい子供の手をひいて笑顔で出迎へる。この日本婦人の内助、これが決して軽いことではないのであつて、これあるが故に我が國は永久であり盛大であるのだと思ふ。

つぎねふの歌  
作者年代不明。萬  
葉集卷十三。

萬葉集の中に今一つ夫婦の情愛をよんだ大變よい歌がある。讀人不知で、歌の内容から見ても身分の低い人の歌と思ふが、夫婦が歌で問答してゐるのであつて、先づ妻が夫に長歌で、

つぎねふ やましろぢを ひと夫の 馬より行くに

おの夫し かちより行けば 見ること 音のみし泣かゆ

そこもふに 心しいたし たらちねの 母がかたみと

あがもたる まそみ鏡に あきつひれ 負ひなめもちて

馬替へわが夫

とよみかけてゐる。山越えの道を、よその夫は馬に乗つて行くのに、うちの夫は歩いて行くので、見てゐる妻の身として、聲を上げて泣きたくなる、思つただけでも胸が痛い。どうかして馬に乗せて上げたいと思ふけれども、家貧にして何の貯へもない。何をがなと考へたところ、こゝに一面の鏡がある。當時としては貴重品、況

や鏡は女魂であり、更にその上母親の遺物といふのだから、自分に取つては命から二番目の大切な品であるが、これを提供しませう。それでも足りぬかも知れないから、私の大事な蜻蛉の羽根のやうに透いたこの肩掛も差出させよう。この二品を取揃へて持つて行つて馬と交換なさい、我が夫よ、といふのである。實に眞情の籠つたよい歌であつて、日本の妻が己を空しくして夫を思ふ貞節は昔からこの通りだつたのである。山内一豊夫人の話は有名であり、貞女の鑑とされてゐるが、しかしそれは一豊夫人の専賣特許ではない。千年の昔既に立派な先例があつたのである。而して一豊夫人の場合には、一豊は夫人が鏡の函から出した金で馬を買つたのであつて、これ亦妻の折角の志を無にしないことで結構だが、萬葉集の夫は妻の差出した鏡と肩掛を受けなかつた。

馬替へばいもかちならんよしえやし

石は踏むともあはふたり行かむ

といふ短歌で斷つた。そなたの志は嬉しいが、私ばかり馬に乗つてそなたを歩かせる譯には行かぬ、えいまゝよ、馬を買ふことはやめにしよう、たとひ険しい石道を踏むとも、我々二人は手に手を取つて一所に歩いて行かうぞ、といふのである。これ亦歌として秀逸であるのみならず、自分さへよければといふ我儘を捨てて、夫婦同體の實意を示したところ、誠に奥床しい限りである。私は日本婦人が萬葉以來引續きかの妻と同じ氣持であることを疑はぬが、更に日本の男たちに萬葉の夫の歌をよく味はつて貰ひたい。

扱て私は右の歌の「石は踏むとも」の一句を殊に意味深く思ふ。人生行路難、どのやうな困難が起るかわからぬが、夫婦相倚り相扶けて如何なる困難をも踏み越えて行かう、といふのであつて、實に頼もしい立派な覺悟である。而して私はこの夫の歌の下の句を、

單に夫婦の間のみならず、國民一般に當てはめたいと思ふ。即ち我が國今日の非常時に處し國難を打開するためには、國民全體が一致團結し、石は踏むとも九千萬人、共に行かむの覺悟を以て進む外ないのである。九千萬人の一半は男子であり、一半は婦人である。萬葉の夫婦が各己を空しくして相提携した如く、國民全體としても男子と婦人とがそれ〴〵その本分を全くして相扶け相伴なひ、如何なる險難をも踏み破り正義を指して眞直に進みたいものである。

妻たることと並んで大切な婦人の本分は母たることである。婦人が母としての本分を盡くすか否かは、次の時代の人類が善くなるか、悪くなるか、將來の日本が盛んになるか衰へるかの岐れ目である。勿論父親も重きをなすが、朝起きるから夜寝るまで引續き子供に接觸してゐるのは母親であるから、母親が善いか悪いか

は直接に子供の善い悪いと關係する。それ故婦人が母親としての任務の大切な事を十分に自覺せねばならぬと同時に、男子は又婦人の母親たる地位を尊重すべきである。

斯様に妻たること母たることが婦人の本分であつて、歴史上賢婦人女丈夫といはれた人が同時に良妻賢母であつた例は澤山あらうが、時には賢婦人女丈夫にして妻とし母としては落第のものもないではない。その適例は頼朝の夫人政子である。政子は所謂尼將軍として天下の政治を左右したのであつて、賢婦人であり女丈夫であるには相違ない。しかし家庭婦人としては果してどうであつたか。その子たる源實朝の歌に

物いはぬ四方のけだものすらだにも

あはれなるかなや親の子を思ふ

といふのがある。言葉も解せぬ野山の獸さへも親の子を思ふ情



はあれ程までに切なるものよ、といふのである。その歌の裏には次のやうな氣持が痛切深刻にあらはれてゐる。禽獸でさへも親は子を思ふのに、母上はどうして我々に對して母たる愛情をもたれないのか、實に情ない悲しいことだ、といふのである。實朝は又いとほしや見るに涙のとゞまらず

親もなき子の母をたづぬる

と歌つた。誠に人生最大不幸の一つは、親なきこと、又親があつても親に愛して貰へぬことである。殊に母の愛は子に取つて何物にも替へ難く貴重である。實朝に歌はれた孤兒も「母よ、母よ」と泣いた。實朝自身も位人臣を極めながら、母の愛なきが故に泣いた。母の愛は實に大切である。單にその子を人とならしめるために大切であるのみならず、次の日本を作り上げる國家的大事業のためには大切なのである。

即ち婦人は母として先づ愛情がなければならぬ。單に賢婦人たるのみでは足りない。しかし又愛情だけではいけない。本當に物の道理がわからねばならぬ。子が少し成長すると母親は忽ちその話相手、相談相手になれなくなる。母と子が別世界に住み、子の方でもあたまから「お母さんには解らない。」ときめこんで母親に寄りつかぬやうになる。實に淋しく悲しいことではないか。故に母親は愛情がなければならぬが、又見識がなければならぬ。子を愛するのみでは足らぬ。子に尊敬されねばならぬ。子が母を愛慕し尊敬し、心の中を打開けて相談するやうでなくてはならぬ。我が國の婦人は愛情においては缺ける所がない。しかし盲目の愛ではいけない。子を敬服させるに足るだけの見識を伴なつた愛情でなければ、本當に母親として本分を全くすることができない。それには我が國の婦人はまだ、大いに修養を積みね

ばならぬと思ふ。今一奮發して、從來の美點を益發揮すると同時に、その不足缺陷を遺憾なく充實されたいものである。男子も亦更に修養を積むべきこと勿論であるが、斯くして一層完成せられたる日本男子と日本婦人とが、所謂石は踏むとも共に行かむの大決心を以て、相扶け相補つて家庭を築き國家を擔ふならば、非常時何かあらん、國難何するものぞ。徒らに非常時國難來を叫んで周章興奮する必要はない。たゞ男女各自その本分を盡くさんのみである。

斯くして我々は男女心を併せ一致團結して我が日本國を守り立てて行かねばならぬのであるが、もしそこに確乎たる中心があれば、一致團結は最も力強いものになる。而して我が國民一致團結の唯一無二なる最も力強い中心點が皇室であらせられることは、多言を須ひぬ。今一度實朝の歌を引けば

山は裂け海はあせなん世なりとも

君に二心ふたこころわがあらめやも

我々日本國民は、平常時といはず非常時といはず、この忠誠の心を以て終始すること勿論である。實朝の歌に又

大海の磯もとゞろに寄る浪の

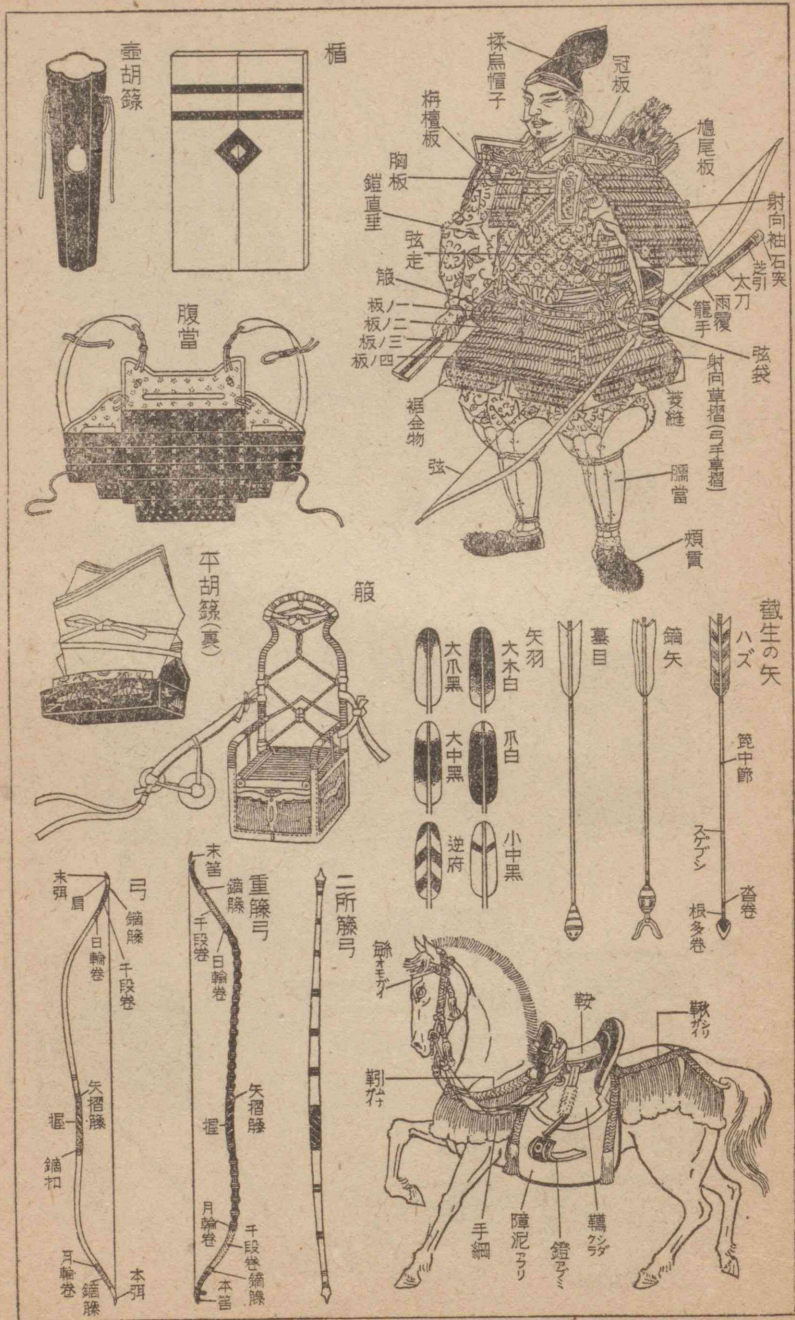
われてくだけて裂けて散るかも

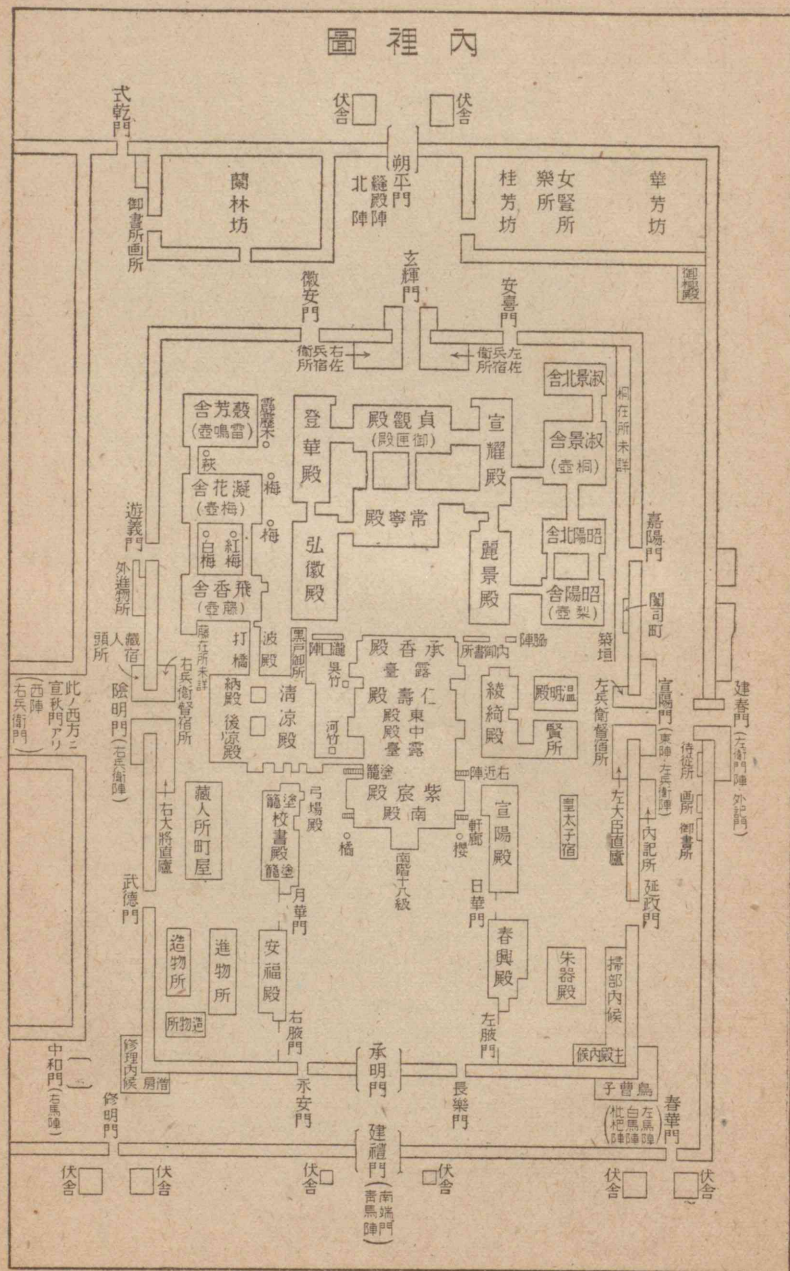
といふのがある。打寄せる大波の力強さを詠ずると同時に、その怒濤が岩に當つて碎け散るその大磐石の巍然たるところを歌つたもので、正しく今日の日本の姿である。我が日本は今や世界の大海原に大磐石の如く屹立してゐる。狂瀾怒濤が後から／＼押寄せて來ても、碎け裂けて散つてしまふ。何とも心強い限りである。しかし斯くあらんがためには、我々が本當に心をひきしめて、強い所は強く、優しい所は優しく、男と女とがそれ／＼その特長を

發揮して、清く美しき社會を築き上げねばならぬ。而してその根本は即ち家庭を清く美しくすることであつて、その大責任は婦人にかゝつてゐるのである。

(講演の一節)

新制女子國語讀本 卷八終



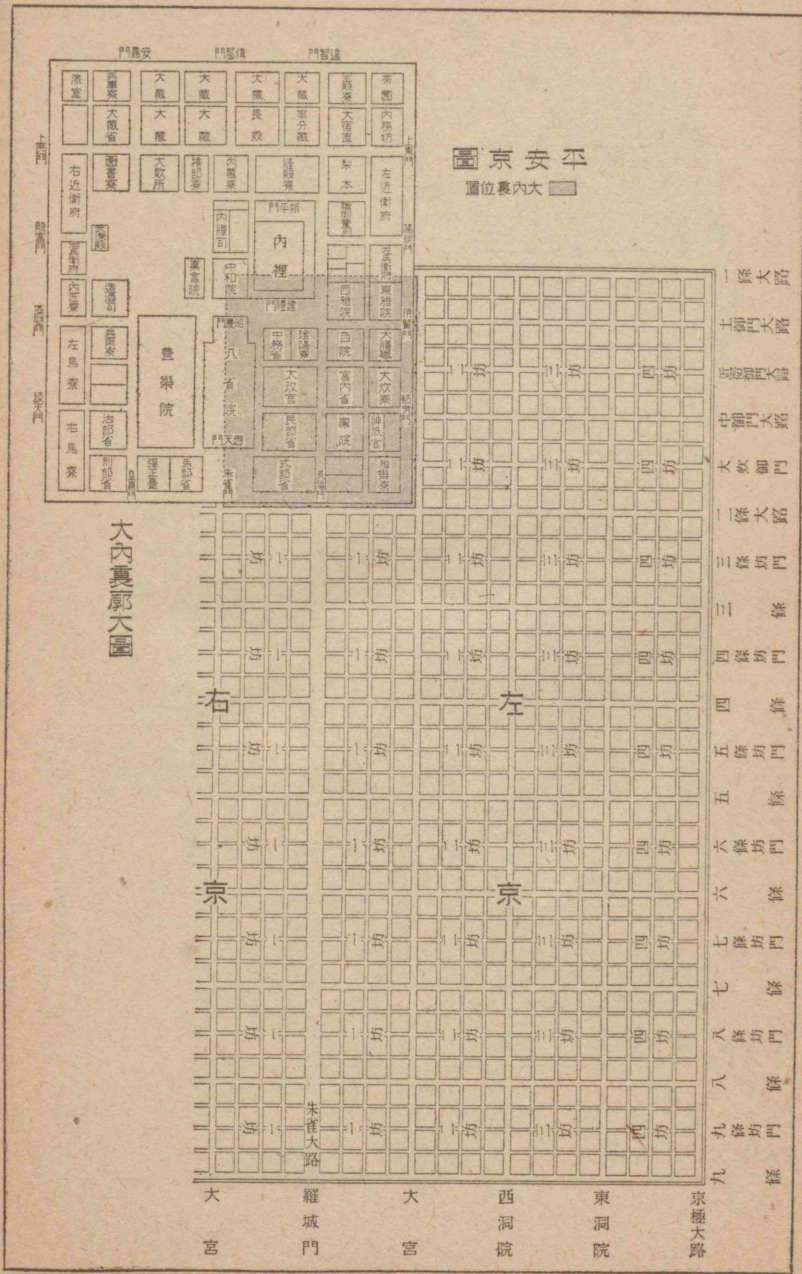


$$\begin{array}{r} 25 \\ \times 19 \\ \hline 225 \\ 475 \\ \hline \end{array}$$

$$\begin{array}{r} 25 \\ \times 170 \\ \hline 1750 \\ 1750 \\ \hline 4250 \\ \hline \end{array}$$

平安京圖

大內裏位置圖



大內裏廓大圖

右 左

京 京

大宮 羅城門 大宮 西洞院 東洞院 京極大路

一條大路  
 上御門大路  
 近衛門大路  
 中御門大路  
 大炊御門  
 一條大路  
 二條坊門  
 三條坊門  
 三條坊門  
 四條坊門  
 四條坊門  
 四條坊門  
 五條坊門  
 五條坊門  
 六條坊門  
 六條坊門  
 七條坊門  
 七條坊門  
 八條坊門  
 八條坊門  
 九條坊門  
 九條坊門



紛れ易き品詞(文語)

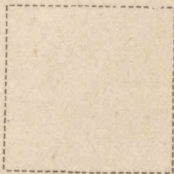
語		たり		なり		らむ		ね				
種用法別	時助動詞 現在完了	指助動詞 定	形容動詞 尾	動詞	指助動詞 定	詠助詞 歎	助動詞 の語尾	推量の助動詞 の	時助動詞 未完了			
用	花咲きたり。	父たり、子たり。	水洋々たり。	事業愈なりぬ。	彼は軍人なり。	花の美しきなり。	日はくるゝなり。	蟲の聲すなり。	山紫に水明らかなり。			
例												
種用法別	過去助動詞 と疑問の助詞	完了助動詞	打消助動詞	未來助動詞	願望助動詞	禁止助動詞	係助詞	願望助動詞	助動詞 の語尾			
用	驚るゝまでこそ戦ひしか。	君はこの本をよみしか。	花咲きぬ。	こぬをまつ。	花咲きなむ。	花咲かなむ。	花なむ咲く。	ゆめ忘るな。	急かすばぬれざらまし。			
例												
種用法別	係	件	係	種用法別	助詞	用	例					
助詞	こそ	なん	か	や	ぞ	ども	ど	ば	とも	と	ば	
用	人こそ見えぬ。	善くなむ見ゆる。	いづれかまさされる。	花や散りし。	見てぞ思ふ。	見れども見えず。	美しけれどとげあり。	波風止まねば同じところ にあり。	品よければ買ひぬ。	問へば答へ、問はざれば 答へず。	繪にかくと筆も及ばず。 よろづよ經とも色はかは らじ。	明日晴天ならば遠足せむ。 急かすばぬれざらまし。
例												

助詞の用法(文語)

種用法別		疑問		反語		禁止		外に含ま しむる		添加		場所・方向		願望	
種用法別	助詞	用	例	用	例	用	例	用	例	用	例	用	例	用	例
助詞	や	有りや無しや。		か	有るか無きか。			や	豈我のみならむや。			な	唯か知らざらむ。		
用															
例															
種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別
助詞	な	悪事をなせそ。		だに	思ふこと筆にだに残さば			すら	我身すら容れられず。			さへ	梓弓おして春雨けふ降り ぬあすさへ降らば若菜つ みてむ。		
用															
例															
種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別
助詞	ば	心あらむ人に見せばや。		へ	前へ進め。			に	机によりかゝる。			に	心あらむ人に見せばや。		
用															
例															
種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別	種用法別
助詞	なむ	花咲きなむ。		な	花散りなば。			ば	心あてに折らばや折らむ。			な	心あてに折らばや折らむ。		
用															
例															

語		尾		接		頭		接		語																						
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
て	ま	し	る	ぶ	む	く	む	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を
ら	ま	し	る	ぶ	む	く	む																									

昭和十六年十月十五日  
 昭和十三年十一月二十五日  
 昭和十二年八月十四日  
 昭和十一年七月廿九日  
 修正三版發行  
 修正三版發行  
 修正三版發行  
 修正三版發行



發行所

編者 安藤正次  
 編者 東條操  
 發行者 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
 發行者 中等學校教科書株式會社  
 印刷者 東京市蒲田區仲六鄉一丁目五番地  
 印刷者 株式會社三省堂蒲田工場  
 代表者 山本慶治  
 代表者 岸本玄男

新制女子國語讀本(四年制用)  
 定價卷一—卷八各六十錢

(略名) 三省安藤女國(八)

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
 中等學校教科書株式會社  
 日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

配給元 日本出版配給株式會社  
 東京市神田區淡路町二ノ九



55  
1/60  
55  
—  
50  
55

本  
四  
八  
四  
八

広島大学図書  
2000301764  
